遺跡調査の概要



調査の理由と工程

1．発掘調査

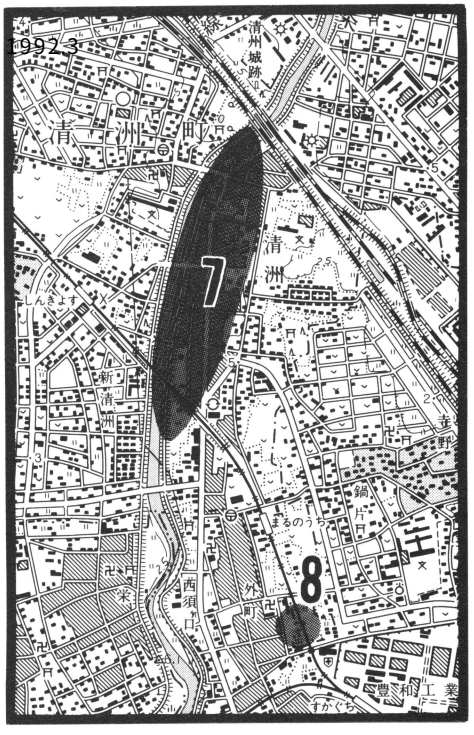
調査委託者	調査の理由	遺跡名	面積(㎡)		調査の期間	調査担当者
建設省	名古屋環状2号線	松河戸遺跡	A	636	91. 8～91. 9	岡本・楯
日本道路公団	(1735㎡)		B	1099	91.10～91.11	岡本・服部
建設省	国道23号バイパス	岡島遺跡	A	1250	91.12～92. 1	大橋・野本・池本
		(2500㎡)	B	1250	92. 2～92. 3	大橋・野本・池本
		室遺跡	A	4400	91. 4～91. 7	山田・大橋・都築・川井
		(8800㎡)	B	4400	91. 8～92. 1	山田・大橋・都築・川井
		牛ノ松遺跡		500	91. 7～91. 8	大橋・野本
	(12100㎡)	不馬入遺跡		300	91. 4～91. 5	大橋・野本・松田
日本道路公団 愛知県土木部	東海北陸自動車道	西上免遺跡		1270	92. 2～92. 3	小塚・太田・赤塚
愛知県衛生部	尾張看護専門学校増築	山中遺跡		1300	91. 9～91.11	石黒・服部
愛知県土木部 (都市整備課)	新川甚目寺線	外町遺跡	A	195	91. 4～91. 5	城ヶ谷・鈴木・小嶋
			B	595	91. 4～91. 5	城ヶ谷・鈴木・小嶋
			C	600	91. 6～91. 7	城ヶ谷・鈴木・小嶋
		(1890㎡)	D	500	91. 6～91. 7	城ヶ谷・鈴木・小嶋
(道路建設課)	新川清洲線	清洲城下町遺跡	A	500	91. 8～91. 9	城ヶ谷・鈴木・小嶋
		(847㎡)	B	347	91. 8～91. 9	城ヶ谷・鈴木・小嶋
	名古屋祖父江線	堀之内花ノ木遺跡	A	500	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
			B	350	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
			C	1400	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
			D	600	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
			E	1700	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
			F	700	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
			G	350	91. 4～91. 7	小塚・太田・赤塚・蟹江
		(7100㎡)	H	1500	91. 8～92. 1	小塚・太田・赤塚・蟹江
	加納東保見線	伊保遺跡	A	875	91.12～92. 3	鷲見・岡本
		(1750㎡)	B	875	91.12～92. 3	鷲見・岡本
	島崎豊田線	坂口遺跡		366	91.10～92. 1	松田・野本

調査委託者	調査の理由	遺跡名		面積(㎡)	調査の期間	調査担当者
(河川課)	国道23号線拡幅	不馬入遺跡		100	91.4～91.5	大橋・野本・松田
	馬飼井堀線	跡ノ口遺跡		2560	91.4～91.7	石黒・服部
	(3440㎡)	一色長畑遺跡		880	91.6～91.7	石黒・服部
	稲沢祖父江線	舟橋宮裏遺跡		1600	91.10～92.1	小塚・赤塚
	坂上花沢線	高樋遺跡		500	91.12	石黒・余合
	五条川改修	清洲城下町遺跡	A	1800	91.12～92.3	城ヶ谷・鈴木・小嶋
			B	1800	91.12～92.3	城ヶ谷・鈴木・小嶋
		(4820㎡)	C	1220	91.10～91.11	城ヶ谷・鈴木・小嶋
	仁王川河川改修	三斗目遺跡		1600	91.12～92.3	石黒・余合
	(2540㎡)	三本松遺跡		940	92.2～92.3	石黒・余合
愛知県警察本部	総合科学センター建設	名古屋城三の丸遺跡	A	1800	91.6～91.8	遠藤・鷲見・余合・岡本・酒井
		(3600㎡)	B	1800	91.9～91.12	遠藤・鷲見・余合・岡本・酒井

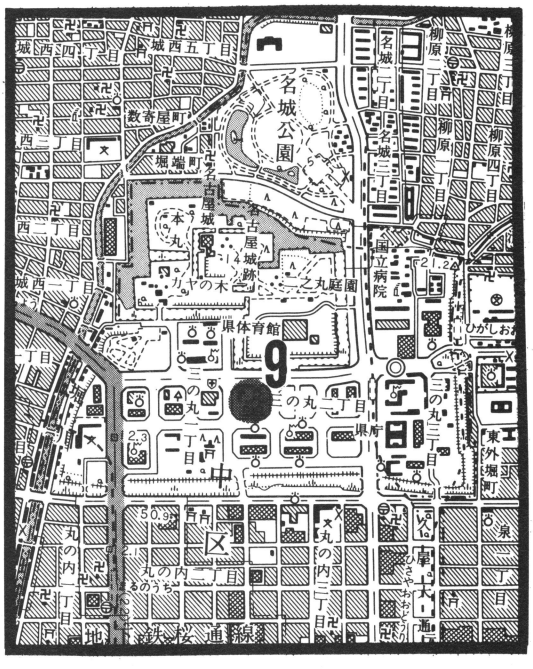
2．報告書

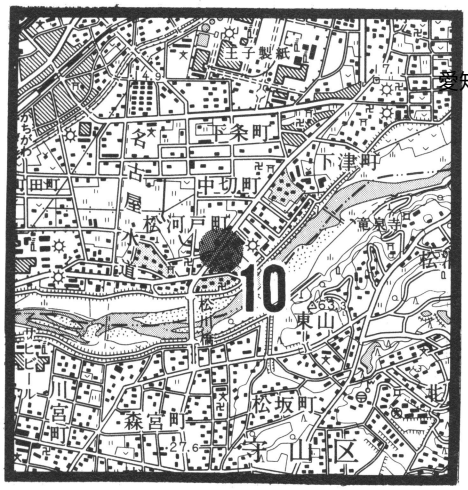
調査委託者	調査の理由	遺跡名	調査面積	調査年度
建設省 日本道路公団	名古屋環状2号線	清洲城下町遺跡	17.231㎡	昭和59～昭和60年度
		朝日西遺跡	13.919㎡	昭和58～昭和60年度
		勝川遺跡	6.607㎡	昭和62～平成2年度
		朝日遺跡	49.624㎡	昭和56･60年度～平成元年度
建設省	名古屋家庭簡易裁判所・合同庁舎建設	名古屋城三の丸遺跡	2.800㎡	平成2年度
	23号バイパス	岡島遺跡	19.250㎡	平成元・2年度
愛知県土木部 (道路建設課)	瑞浪大野瀬線	上万場遺跡	4.500㎡	平成2年度
	蒲郡碧南線	東光寺遺跡	10.000㎡	平成元・2年度
	萩原多気線	岩倉城遺跡	10.470㎡	昭和62～平成2年度
	勝川土地区画整理	勝川遺跡	6.375㎡	昭和59～平成2年度
愛知県衛生部	尾張病院改築	山中遺跡	3.500㎡	平成2年度
愛知県民生部	老人ホーム建設	上の平遺跡	3.750㎡	平成2年度
愛知県警察本部	豊橋警察署改築	吉田城遺跡	600㎡	平成2年度
住宅都市整備公団	水野土地区画整理	小田妻古窯跡群	2.000㎡	平成元年度

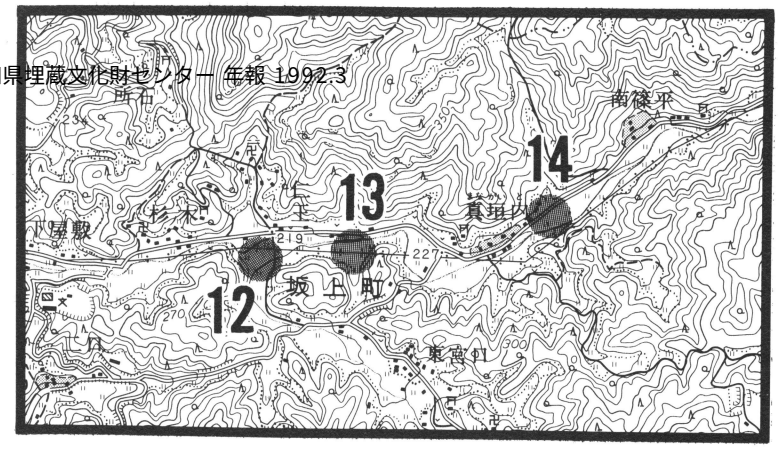


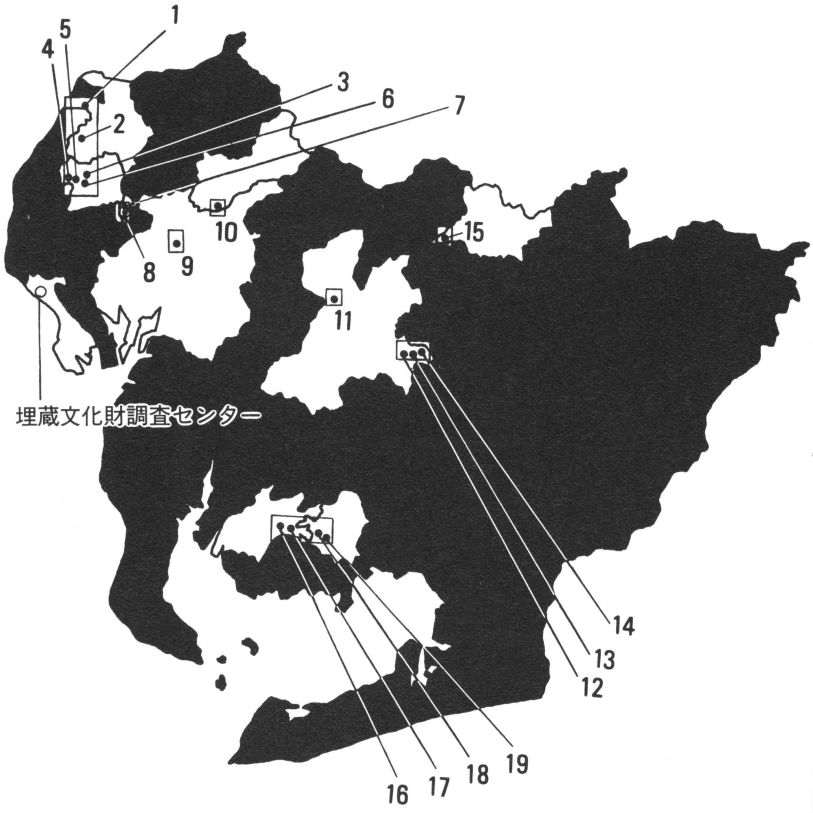


1．西上免遺跡
2．山中遺跡
3．船橋宮裏遺跡
4．跡ノ口遺跡
5．一色長畑遺跡
6．堀之内花ノ木遺跡
7．清洲城下町遺跡
8．外町遺跡
9．名古屋城三の丸遺跡



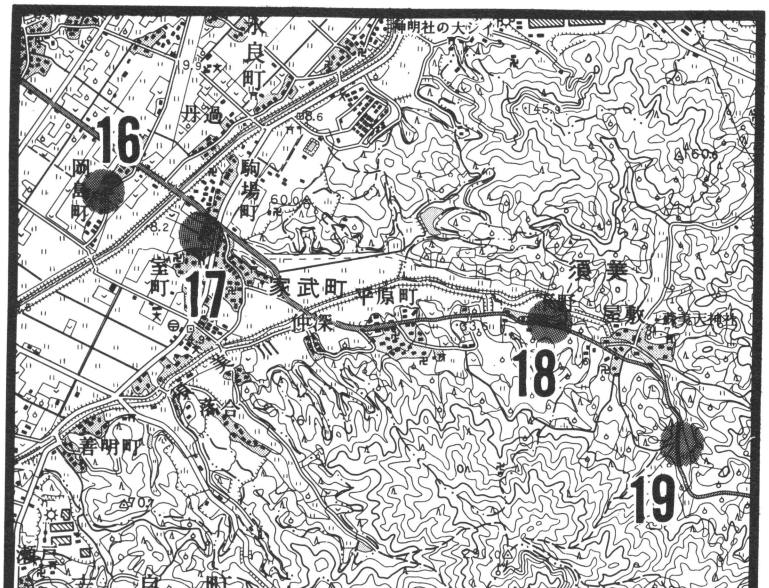








10. 松河戸遺跡
11. 伊保遺跡
12. 三斗目遺跡
13. 三本松遺跡
14. 高樋遺跡
15. 坂口遺跡
16. 岡島遺跡
17. 室遺跡
18. 牛ノ松遺跡
19. 不馬入遺跡

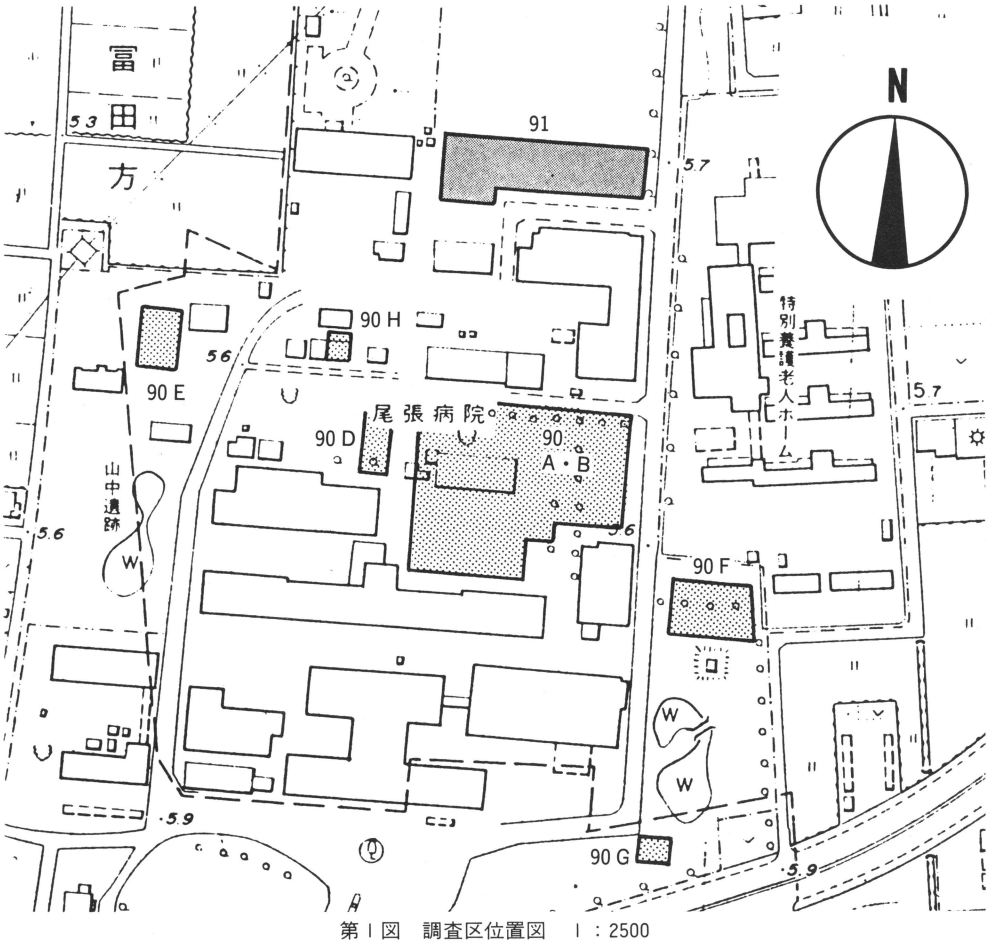




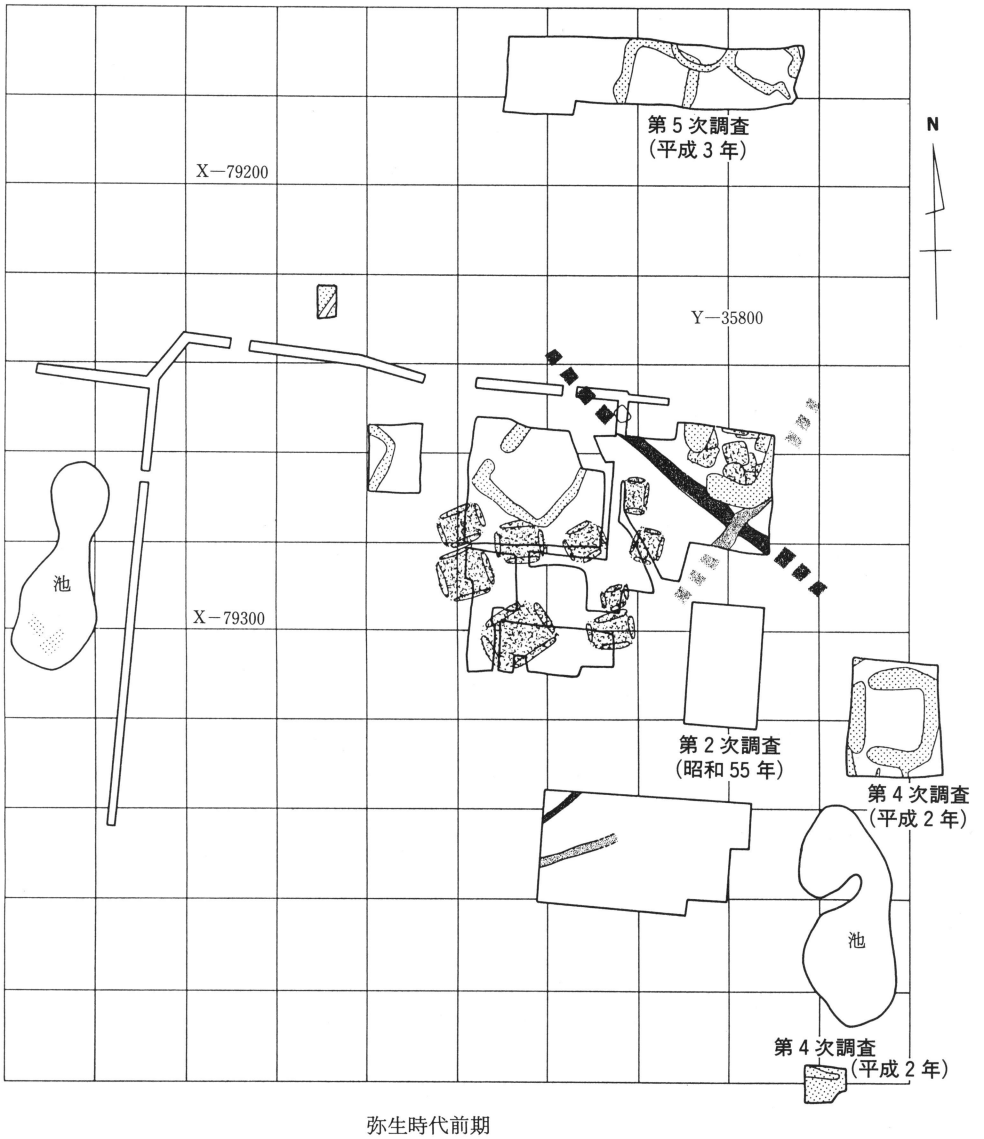
山中（やまなか）遺跡

調査の経過

濃尾平野のほぼ中央に位置する一宮市は、犬山扇状地の扇端部でもあることから、伏流水が湧き出す水の町として、古くから多くの産業と文化を育んできた。そして市域西方に位置する萩原町周辺では、木曽川により形成された自然堤防がよく発達し、北から山中遺跡・南木戸遺跡・苗代遺跡・二夕子遺跡・河田遺跡と、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が密集している。なかでも、山中遺跡は弥生時代後期の標式遺跡として著名であり、その発見は昭和34年に遡る。県立尾張病院建築、改築に伴い昭和34年に第一次調査、昭和55年に第二次調査、続く昭和56年に第三次調査が行われ、縄文時代晩期から弥生時代全般にわたる遺構・遺物が検出されている。



第Ⅰ図　調査区位置図　1：2500


第5次調査
(平成3年)
N
X−79200
Y−35800
池
X−79300
第2次調査
(昭和55年)
第4次調査
(平成2年)
池
第4次調査
(平成2年)
0
40m
弥生時代前期
墓・住居
大溝
弥生時代中期
大溝
弥生時代後期～古墳時代
墓・水田

第2図　主要遺構配置図

昨年度、県立尾張病院の改築に伴い、第四次調査を実施した。調査の結果、竪穴住居・方形周溝墓・水田などをはじめとする縄文時代晩期から古墳時代初頭にかけての遺構・遺物を良好な状態で検出することができた。特に弥生時代前期にまで遡る方形周溝墓の発見は特筆すべきものである。

今回、県立尾張看護専門学校の増築に伴い第五次の発掘調査実施されることになった。調査面積は1,300㎡である。（小塚俊夫）

調査の概要

本年度の調査では、①弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての方形周溝墓３基（うち１基は前方後方形周溝墓）、②古墳時代後期の円墳１基、③古代の溝、④中世村落の北西端と墓域が検出された。このうち、①の「前方後方形周溝墓」（ＳＺ03）の検出が注目される。①ＳＺ03は南溝と北溝の一部を検出した。周溝のつくる平面形は、後方部が東西方向が長い五角形をなし、五角形の頂部1.5ｍを残して周溝は途切れて開口部をつくっている。南北の溝はそれぞれ外側に折れ「ハ」字状に開いて張り出し部（前方部）を形成している。平面形はやや不整形だが、いわゆる「前方後方形周溝墓」に含まれるものと考える。主体部は東辺寄りに１基検出した。供献土器は南溝から壺が大形１個、小形３個出土した。時期は弥生時代後期末から古墳時代初頭と推定される。昨年度の調査でも周溝をつくり替えた古墳時代前期の前方後方形周溝墓が検出されていたが、今回はそれより時期が遡る資料となる。

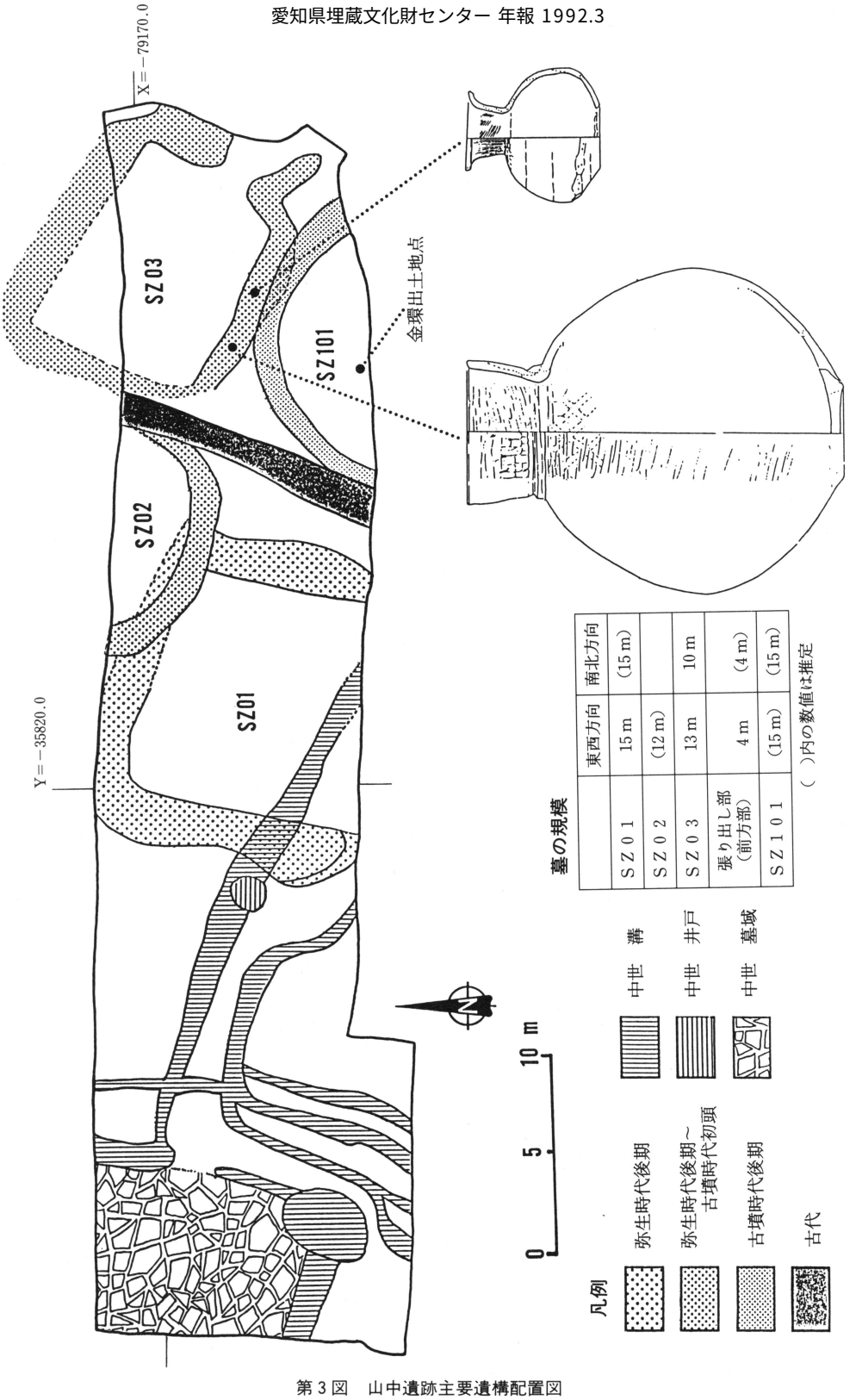
方形周溝墓３基のうち一番古い弥生時代後期中ごろのＳＺ01は調査区内において東西の溝と北溝の一部が検出されたが、南溝は調査区外にある。溝の外縁は膨らむなどして不定形だが、内側は直線的で方形になっている。おそらく南に２ヶ所の土橋をもつと推測される。遺体を葬った主体部は不明。供献土器など遺物はほとんど出土していない。



発掘区東部



ＳＺ03供献土器



第３図　山中遺跡主要遺構配置図

ＳＺ02はＳＺ01の北端の一部に重複して周溝が掘削されている。全体の３分の１程度の検出にとどまった。周溝はゆるく曲線を描きながら巡っており、内側も曲線的でＳＺ01のようにはなっていない。ＳＺ01の周溝がかなり埋没してから溝が掘削されていること、平面形が方形でなく円形に近いことから、時期的には新しくなるものと推測される。周溝からは土器と鉄製品が出土した。

②ＳＺ１01は６世紀代の円墳の周溝部分を検出したものである。昨年度も同時期の須恵器を出土したがその由来は不明であった。今回それが古墳に伴うものであることが判明したとともに、他にもまだ存在している可能性が高いものとなった。遺物としては、直接古墳に伴ってはいなかったが、周溝のつくる円弧の内側（墳丘側）の地山直上から金メッキの耳飾り（金環）が１点出土した。副葬品であったかもしれない。

③古代の溝は９世紀前半に属する。性格は不明。

④中世の遺構としては、調査区西部で検出したア：平行して走る複数の溝、イ：大きな長楕円形の土坑とそれに直交する溝などがある。

ア．鍵状に屈折しながら平行している西に走る溝は通路の側溝と推測される。南側溝は南北方向に平行して走る細い溝を３条分岐させている（うち中央１条は調査区を南北に横断している）が、これらは同時期ではなくつくり替え（拡張）によるものである。そして東西方向の溝にくらべて南北方向の溝の規模が小さいのは、それらが柵の根固めをするための溝であって、おそらく以南が集落内部である。北側溝は北へＬ字状に折れるが、これより以北には畝溝状の部分もあるので耕作地（畠）であった可能性が高い。

イ．大きな長楕円形の土坑とそれに直交する溝は上部が再掘削されて、北へＬ字状に折れる溝が設けられている。この溝は北側溝が北へ折れた部分と軸線を一致させており、アの通路部分では途切れて出入りを行うことができる「区画」をつくっている。溝に堆積した灰色粘土からは完全な形をした皿や骨片、炭などが出土した。骨片は火葬人骨片と推測される。この区画北部には埋土の断面が斑状をなす長方形の土坑が二つあり、これも墓（土坑墓）と考えられることから、Ｌ字状溝より北西の区域は墓域であった可能性が高い。

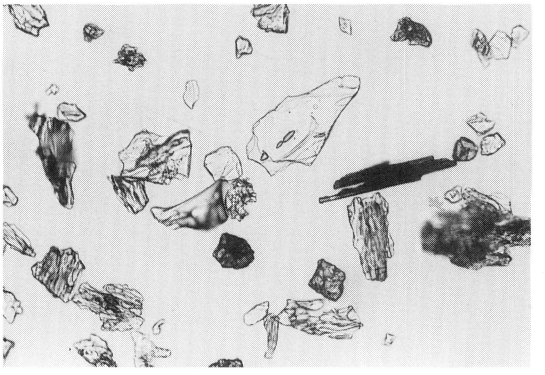
以上、通路を挟んで南北に集落と耕作地、その西に墓地という、村落景観の一端を明らかにしたといえよう。（石黒立人）

山中遺跡の層序

人の生活の場として山中遺跡の形成過程を地質学的な見地から検討するため、トレンチにより地下層序の確認を行った。（第４図）これにより確認できたのは、約5.5m分（＋0.5mまで）の範囲である。地層を構成する砂層、シルト層などの堆積物の堆積環境の解明は今後の研究課題となるが、今回、＋1.07m付近の暗褐色腐植質シルト中より火山灰層が発

見されたので、ここに紹介しておく。

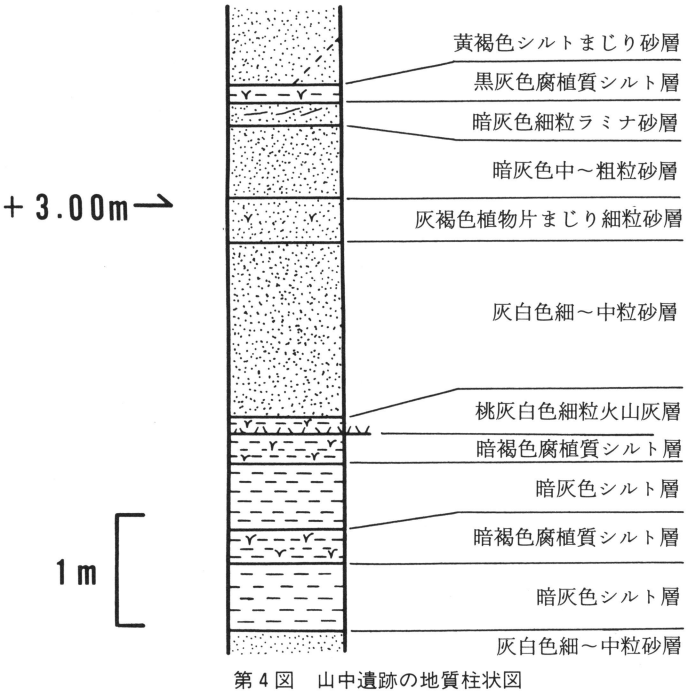
この火山灰層は、厚さ最大1.5cmの桃色がかった灰白色の細粒ガラス質火山灰層で含まれる火山ガラスの形状は、吉川（1976）のTb型が多い。層位的には、森ほか（1990）の松河戸火山灰層（MT）に対比される可能性が極めて高い。松河戸火山灰層（MT）は、三瓶・太平山火山灰層を含む山陰に起源をもつ火山灰層との対比が有力視され、その降灰年代は3120年前、縄文時代後・晩期の境界付近に位置するとされている。これにより、古くから知られている広域テフラの姶良Tn火山灰層（AT）、鬼界アカホヤ火山灰層（K－Ah）などとあわせてより正確な時間軸を設定する鍵層として注目されよう。特に、尾張低湿地での発見は今回が初めてであるが、これを機に、各地での発掘調査、ボーリング調査などの際に確認されれば同一時間軸を使った考古学的考察、地質学的考察に有効な火山灰層となり得よう。（服部俊之）



火山灰の顕微鏡写真（×60）

引用文献

吉川周作1976　大阪層群の火山灰層について．（地質学雑誌82,497-515.）
森　勇一・伊藤隆彦・宮田英嗣1990　愛知県町田・松河戸遺跡から発見された縄文時代後・晩期の境界付近に位置する火山灰層について．（『第四紀研究』29,17-23.）



第4図　山中遺跡の地質柱状図

西上免遺跡（にしじょうめん）

調査の経過

西上免遺跡は一宮市今伊勢町馬寄および尾西市開明にかけてひろがる複合遺跡である。現況は標高７ｍの水田および畑地であり、弥生時代から鎌倉時代の遺物散布地として県遺跡番号0701として登録されている。昨年度、初めて調査が行われ、古墳時代から鎌倉時代にかけての溝・土壙などの遺構が検出された。今年度も、1992年２～３月にかけて東海北陸自動車道建設予定地内で実施し、調査区は昨年度調査区の南側を92Ａ区、北側を92Ｂ区と設定し、計1270㎡を調査した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、耕作土層・褐色シルト層・黒褐色粘土層・黄褐色シルト層である。調査区内で確認しえた遺構は、出土遺物により４期に分けて考えることができる。主要遺構は以下のとおりである。

弥生時代中期～古墳時代初頭	溝５条
奈良時代	溝４条・土坑４基
鎌倉時代	溝６条・井戸６基・掘立柱建物２棟
室町時代	土壙31基

今回の調査において、確認できた遺構の性格を上記の時期別に概観すると、弥生時代中期から古墳時代初頭においては、溝を中心とするためその性格は不明の点が多い。しかし、調査区南に展開すると推定される弥生時代の集落との関係でまずはとらえておく必要があろう。奈良時代においては、大溝等の配置からその南に集落が拡がっていた可能性が考えられよう。また、鎌倉時代においては掘立柱建物・井戸の組み合わせにより、数カ所に屋敷地が想定される。そしておおよそ14世紀初頭には終焉し、室町時代においては方形土壙群が配置された墓域となる様子が窺える。

遺物については、南側の91Ａ区からの出土量と北側の91Ｂ区からの出土量には大きな差があり、91Ｂ区が遺跡の北端部であることが推定される。遺物の大部分は灰釉系陶器であり、その他美濃須衛産の須恵器の出土が見られた。また、石鏃が４点、研磨に用いたと思われる軽石３点、縄文晩期の土器片１点も出土している。（太田芳巳）



91 A 区全景

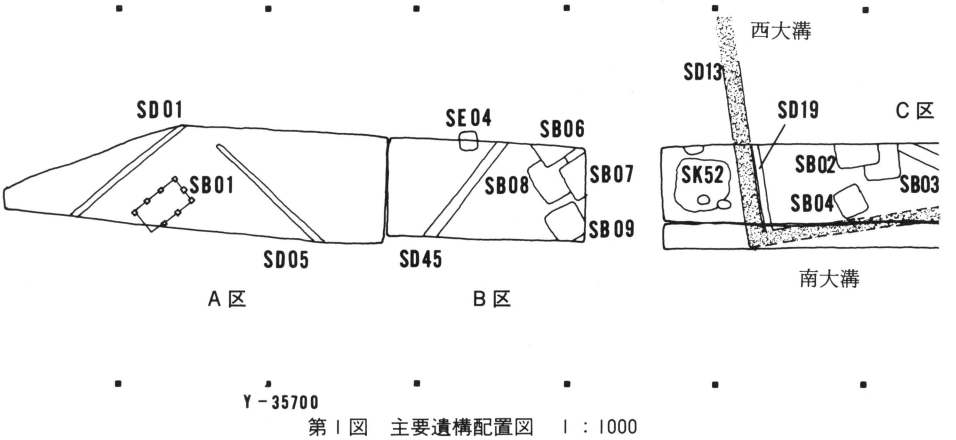
堀之内花ノ木遺跡

調査の経過

堀之内花ノ木遺跡（稲沢市遺跡番号５－４）は木曽川の分流、三宅川が形成した自然堤防の左岸に位置する。行政的には稲沢市堀之内町に在り、「尾張国分寺」の石碑が存在する矢合町の南に隣接する。

遺跡周辺では、昭和36年、中日新聞社が中心となり、愛知県、稲沢市などの協力事業として発掘調査が行われ、尾張国分寺の塔の心礎および金堂とみられる基壇の一部が確認されている。[1] その後、昭和59年に南門推定地を流れる用水路の護岸改修工事にともなって稲沢市教育委員会が発掘調査を行った。[2]

今回、県道名古屋祖父江線の建設にともなう事前調査を、愛知県教育委員会から委託を受け４月より行ってきた。調査面積は7100㎡におよび、東西約450ｍの細長い調査区を西より８つの調査区に分割し、調査を行った。Ａ～Ｃ区を４月から、Ｄ～Ｆ区を８月から、Ｈ区を11月から調査を開始し、１月にすべての調査を終了した。調査の結果、本遺跡は、尾張国分寺関連遺構を中心とし、弥生時代後期から中近世にいたる幅広い時期の複合遺跡であることが確認された。



第１図　主要遺構配置図　１：1000

調査の概要

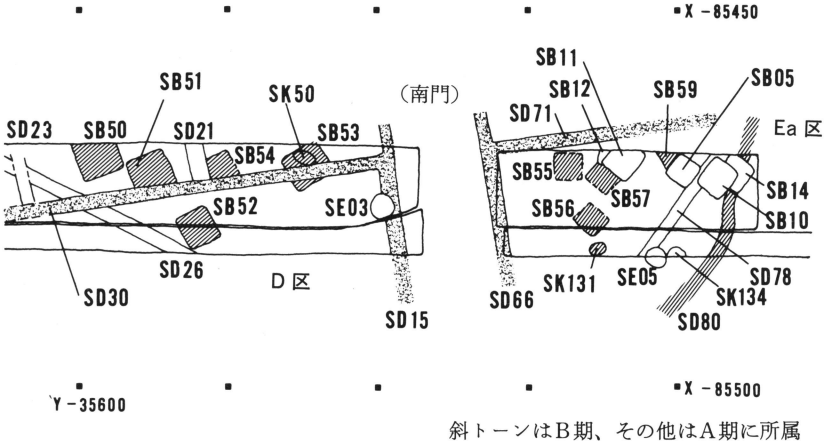
調査区は三宅川左岸の微高地に立地し、標高は約2.5mである。基本層序は、第１層：耕作土、第Ⅱ層：褐～暗褐色シルト層、第Ⅲ層：黄褐色砂およびシルト層である。

遺跡は、出土遺物により、Ａ期：弥生時代後期から古墳時代前期、Ｂ期：奈良から平安時代、Ｃ期：中世、Ｄ期：江戸時代と４期に分けて考えることができる。ここでは、紙面の都合上、Ａ期およびＢ期を述べるのみとする。

Ａ期　この時期の遺構はＣ・Ｄ区の東半部からＥ・Ｆ区の西半部にかけてと、Ｈ区の中央部に見られる。Ｃ・Ｄ区からは弥生時代後期の竪穴住居５棟が検出できた。ことにＳＢ53内の土坑ＳＫ50からは多くの遺物が出土した。Ｅ・Ｆ区からは弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居４棟、溝１条を検出した。Ｈ区からは古墳時代前期の２基の土坑よりパレス壺、Ｓ字甕などの多くの遺物を出土した。

Ｂ期　遺構は調査区全域に散在するが、Ｂ区からＥ・Ｆ区の西部に集中して見られる。Ａ区からは、奈良時代の建物跡と屋敷地を画する溝を検出した。Ｃ・Ｄ区からは幅2.2m長さ約12mの南北方向の溝、幅2.0m長さ約72mの東西方向の溝を検出した、出土遺物、規模からして、尾張国分寺の寺域を画する溝の可能性が高い。その他、土坑、井戸、住居跡等多数の遺構を検出した。Ｅ・Ｆ区からは、竪穴住居４棟の他、溝、土坑、井戸を検出した。

（太田芳巳）

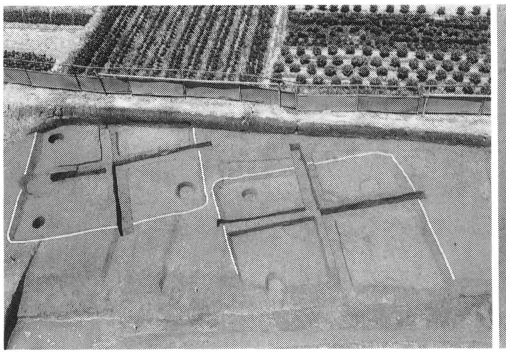


斜トーンはＢ期、その他はＡ期に所属

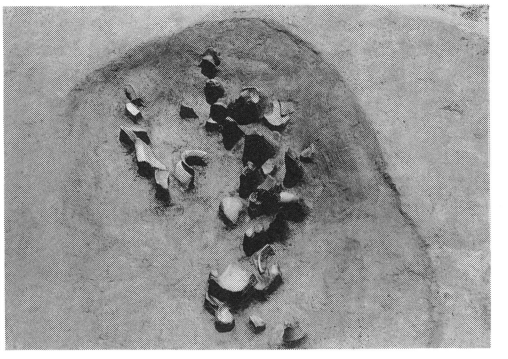
A期（弥生時代後期・古墳時代初頭）

遺構　C・D区東半部からEa・Fa区にかけて、弥生時代後期から古墳時代初頭の遺構を集中して検出することができた。これらの遺構が広がる地点は、堀之内花ノ木遺跡が所在する微高地西端に位置することから、さらに西低地部を耕地として取り込んだ、一つの単発的な小集落を想定できよう。またその関連では南側に所在する琵琶戸遺跡も考慮に入れる必要がある。さて今回検出できた主要遺構は、竪穴住居9棟。土坑及び土器集積が3ヶ所であった。出土土器から山中式後期[3]をもって集落が開始され、廻間Ⅰ式前半期をもって集落は消失したと推測でき、その中心はおおよそ山中式後期にあり、その段階でほとんどの住居が築かれているようである。ところで竪穴住居は全て方形プランをもち、SB50・51は検出面で約方5mを測る。SB52（廻間Ⅰ式1段階）は4.5×4mで、四隅に主柱穴（西南は攪乱）を確認し、中央やや南よりに土坑が存在する。また全体に炭化物の堆積が認められ、土器の集積が伴なっていた。Ea区の展開する住居は古代・中世の遺構との重複が著しく、形態の把握ができない。SK131は皿状の土坑で、SD80は幅1m深さ約0.4mの溝である。なおこの溝を境に、その東には住居は存在しない。SX03はSD80よりさらに45mほど東に位置する土器集積で、周囲には数基の土坑が営まれていた。SK50はSB53内に掘削された楕円形状の土坑で、2.2m×1.3m、深さ0.35mを測る。土坑内より一括して土器が出土している。

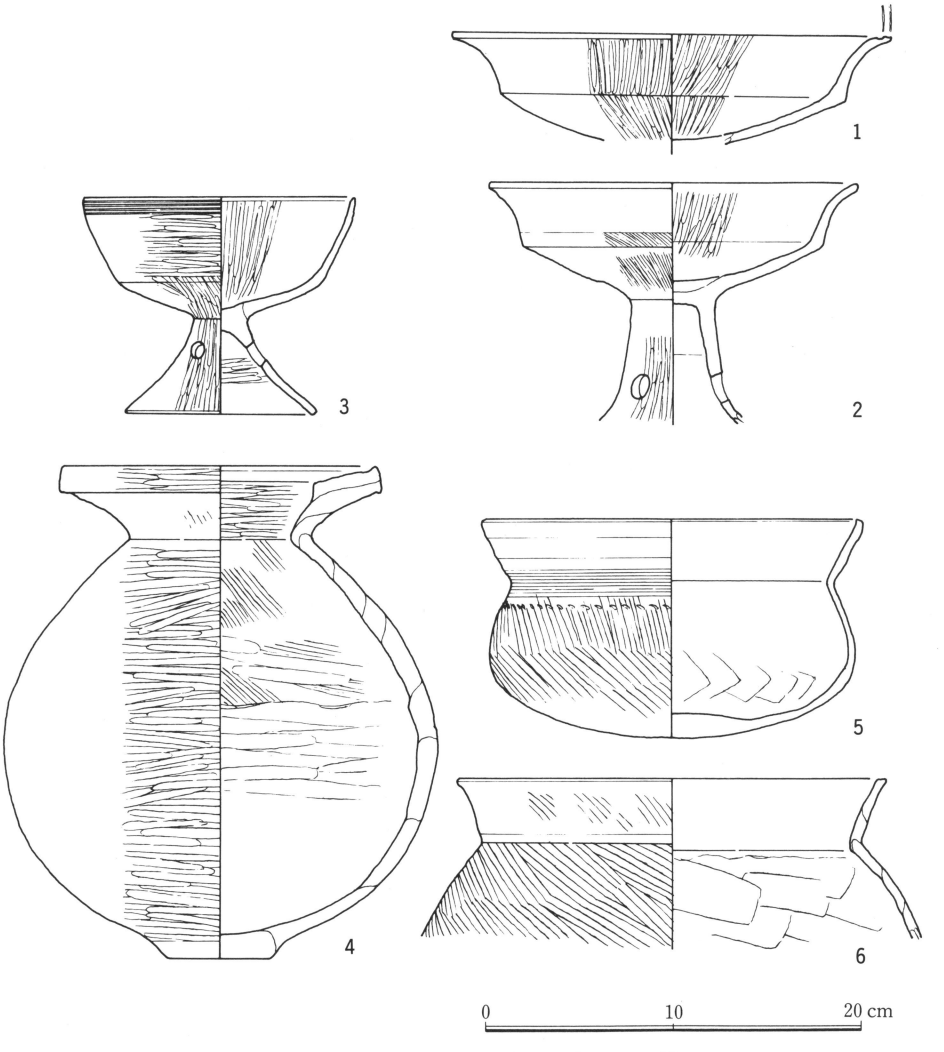
遺物　第3図はSK50出土土器。7は受口系甕で、口縁外面に刺突文、体部上位に横線文とやや不揃いながら刺突文を施す。8・9は口縁端部に刺突文を施す台付甕。12・13・14は有段高杯で、12・13は杯部外面上位に波状文が見られ、口縁端部には2条の擬凹線が巡る。14はミガキ調整による高杯。15は鉢で、口縁部には有段の痕跡を残す。16はパレス壺の口頸部で、内面文様帯以外は全面ベンガラ塗布。17～20は中・小型壺。その内19・20は、土坑最下部より出土した。これらの資料は一宮市苗代第Ⅱ地点出土土器のものと類似するも、やや新しい様相を留めるものといえよう。山中式4段階の良好な一括資料である。第4図はSB52出土土器で、その内注目される資料としては、25のS字甕であろう。その形状と調整技法からS字甕0類と考えてよく、21・22の受口系甕や26・27の台付甕との共伴が興味深い。23は鉢の口頸部。34・35は器台の大・小で、35は中空形態を留める。これらの資料は廻間遺跡SB75と類似するも、さらにやや古い様相を留め、廻間Ⅰ式1段階古相の良好な資料と考えられる。第2図3～6はSX03出土土器であり、3の資料は有稜高杯、5は有段が省略され長頸化した鉢。4は口縁内面に平坦面をもつが文様は施されていない。こうした資料は廻間Ⅰ式1段階に所属する資料である。　（赤塚次郎）



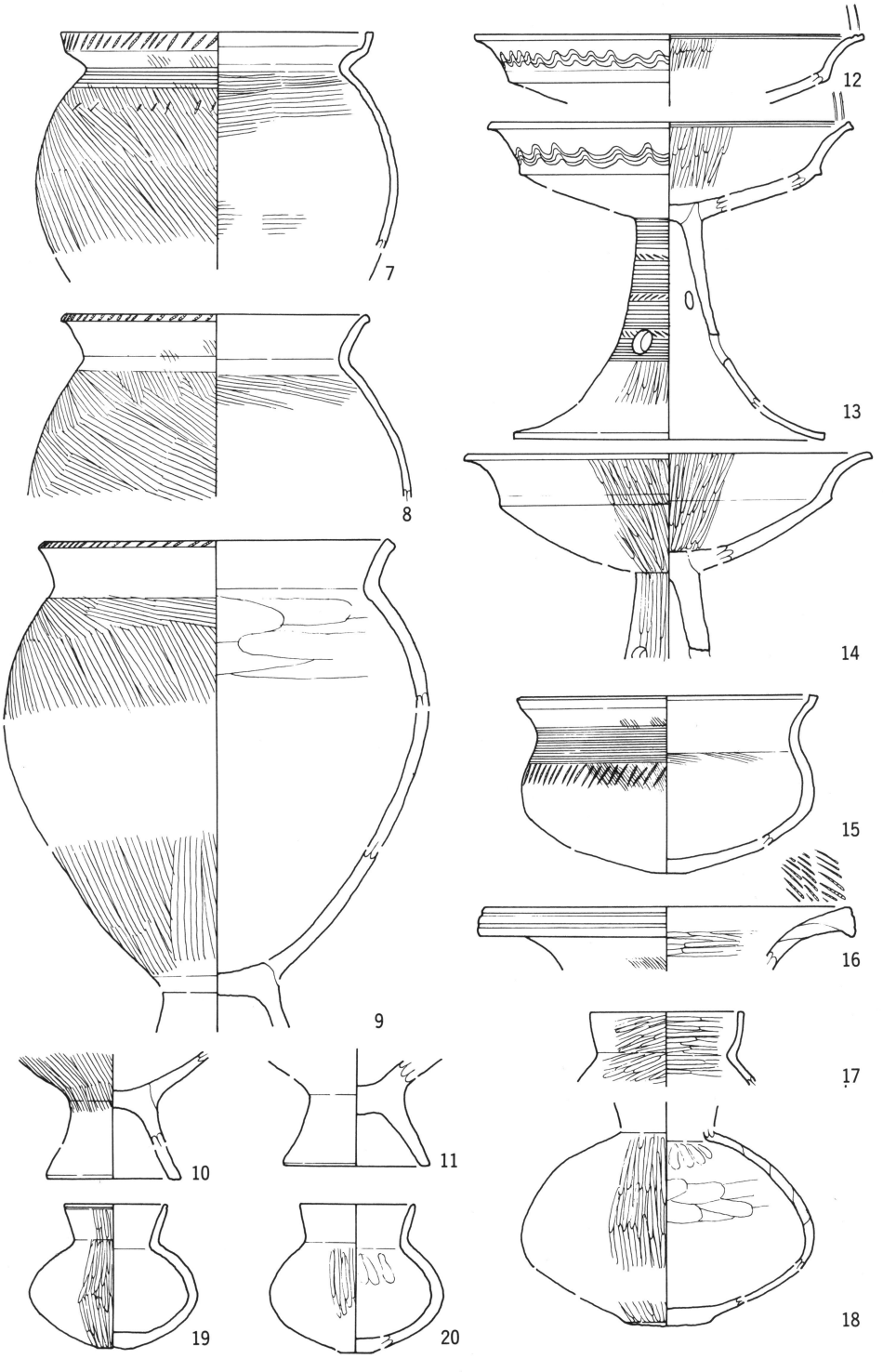
S B50・51



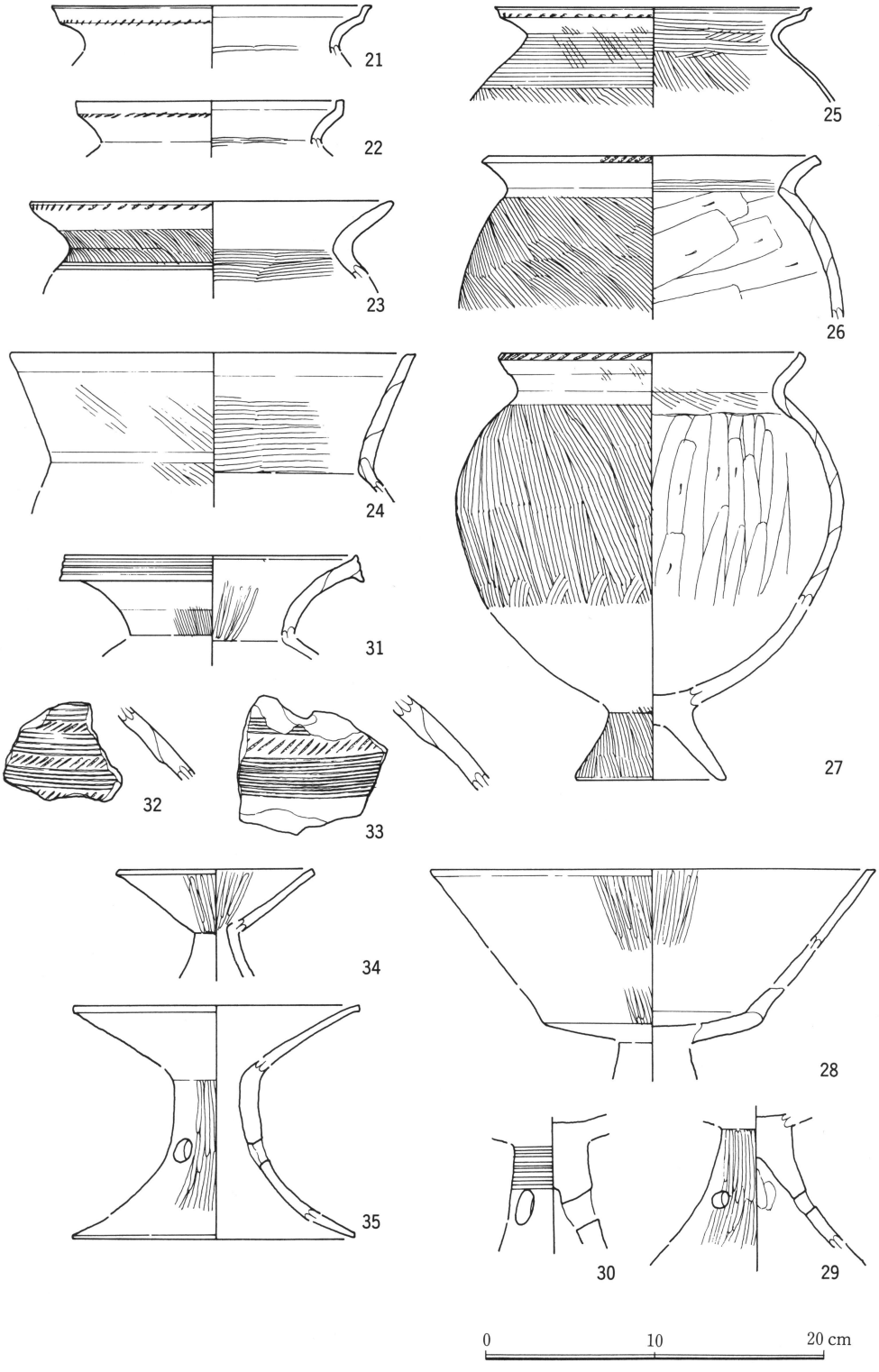
S K50



第2図　S B54（1・2）　S X03（3～6）出土土器　1：4



第3図　ＳＫ50出土土器　Ｉ：４



第4図　ＳＢ52出土土器　Ⅰ：4

Ｂ期（奈良・平安時代）

遺構　今回検出し得た主要遺構は、掘立柱建物１棟、竪穴住居11棟、溝13条、井戸３基、土坑２基などである。Ｃ・Ｄ区西端で検出されたＳＤ13は須恵器を中心とした遺物を出土し、幅2.2～2.3m、深さ0.7～0.8mを測る。Ｃ区で検出されたＳＤ30は須恵器に加え多くの灰釉陶器を出土し、幅1.5～2.0m、深さ0.4～0.47mを測る。この２条の溝はその交わる部分に中世の溝が重複していたが、ほぼ直交するものと思われる。ＳＤ30はＣ区東端でＳＤ15と直交する。ＳＤ15は須恵器、灰釉陶器を出土し、幅2.1m、深さ0.36mを測る。またＳＥ03はＳＤ15が廃絶した後に掘削された井戸である。径2.99mの掘形、深さ1.04mを測り内部にほぼ正方形（0.81m×0.82m）の横板組木枠と径0.5mの曲物１段が確認され、木枠の裏込めとして尾張国分寺使用瓦が集積されていた。なおＡ・Ｂ区、Ｃ区西端で検出された住居群（ＳＢ01～04・06～09）、井戸（ＳＥ04）、溝（ＳＤ01・05・45・26）は８世紀前半に所属し、Ｅａ区東端の住居群（ＳＢ05・10～12・14）は９世紀後半に所属する。

遺物　ＳＤ13中層より良好な須恵器の一括遺物が得られた（第６図１～13）。１は風字硯で上部が欠損している。２は盤の脚部で透孔を有する。３・４は高台を有する杯。５は高台を有する椀。６・７は高台を有する盤。８は杯蓋。９・10・11は高台を有しない杯で、底部から腰にかけて回転ヘラ削りが施される。12・13は無高台の椀で、底部は糸切り痕がそのまま残されている。以上のような様相からこれらの遺物は猿投窯編年における折戸10号窯式を中心とする時期に所属するものと思われる。またＳＥ03出土の遺物（第６図15～27）は15の土師器甕、24の須恵器杯を除いて全て灰釉陶器である。16は耳皿で底部に糸切り痕を残す。17・18は長頸壺。19は段皿。23は杯蓋。20・21・22・25・26・27はいわゆる三日月高台を有する椀で、20～22は内面体部に灰釉が刷毛塗りされている。以上のような様相からこれらの遺物は、猿投窯編年における黒笹90号窯式に属すると思われる。なお14は猿形陶製品で、底部は本体から離脱した痕跡を残しているが全体の形状や用途については不明である。軒瓦（第７図１～13）については、１～５がＳＤ13出土、６・７がＳＤ30出土、８～11がＳＥ03出土、12・13がＳＤ45出土である。尾張国分寺出土瓦の型式に当てはめれば[4]、１がＭⅢ、２・13がＭⅤ、３・４・５がＨⅡ－Ｂ、６がＨⅡ－Ｃ、７がＨⅡ－Ａ、８がＨⅧ、９がＨⅥ、10がＨⅣ、11がＨⅢ－Ａ、12がＨⅡ－Ｂである。なお現在のところ１と３・４・５が創建瓦と考えられており、７については平城宮6712Ｄ型式と同笵である可能性が高い[5]。

以上のような遺構、遺物の状況からＳＤ13はＳＤ30とともに尾張国分寺の寺域を区画する大溝であると考えられ、ＳＤ15の東側に「南門」の存在を想定できる。またＳＥ03は尾張国分寺廃絶後に掘削された井戸であり、『日本紀略』に見られる884年の尾張国分寺焼失

記事と整合する可能性が高い。

まとめ

今回の調査成果をまとめておくと以下の２点になる。

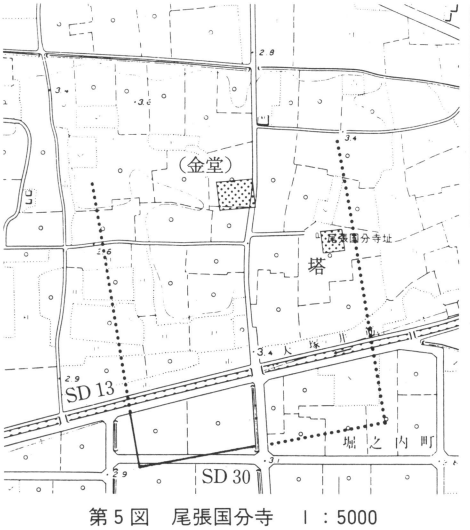
１．Ｃ・Ｄ・Ｅａ・Ｆａ区から山中式後半期を中心とする竪穴住居を検出した。

２．尾張国分寺の寺域を区画すると考えられる溝ＳＤ13・ＳＤ30は昭和36年に調査された「塔」跡や「金堂」跡の中軸線の方向と概ね一致する。また想定される寺域の東西規模は約166ｍとなり、従来考えられていた寺域よりも東西幅がやや短く、南北幅が大きく拡大する可能性が高くなった。（第５図参照）　　（蟹江吉弘）

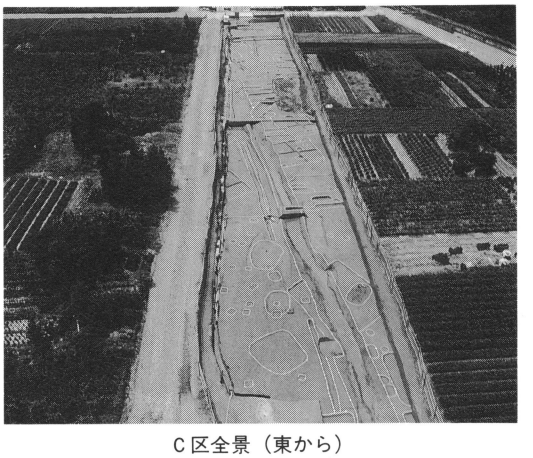
註

１）浅野　清編1968『尾張国分寺の発掘調査』稲沢市教育委員会
２）日野幸治他1983『尾張国分寺跡緊急発掘調査報告書』稲沢市文化財調査報告ＸⅨ
３）赤塚　次郎1992「山中式土器」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告第40集
４）註１に同じ。
５）梶山　勝　1991「尾張国分寺軒瓦とその同型瓦の分布をめぐって」『名古屋市博物館研究紀要』第14巻

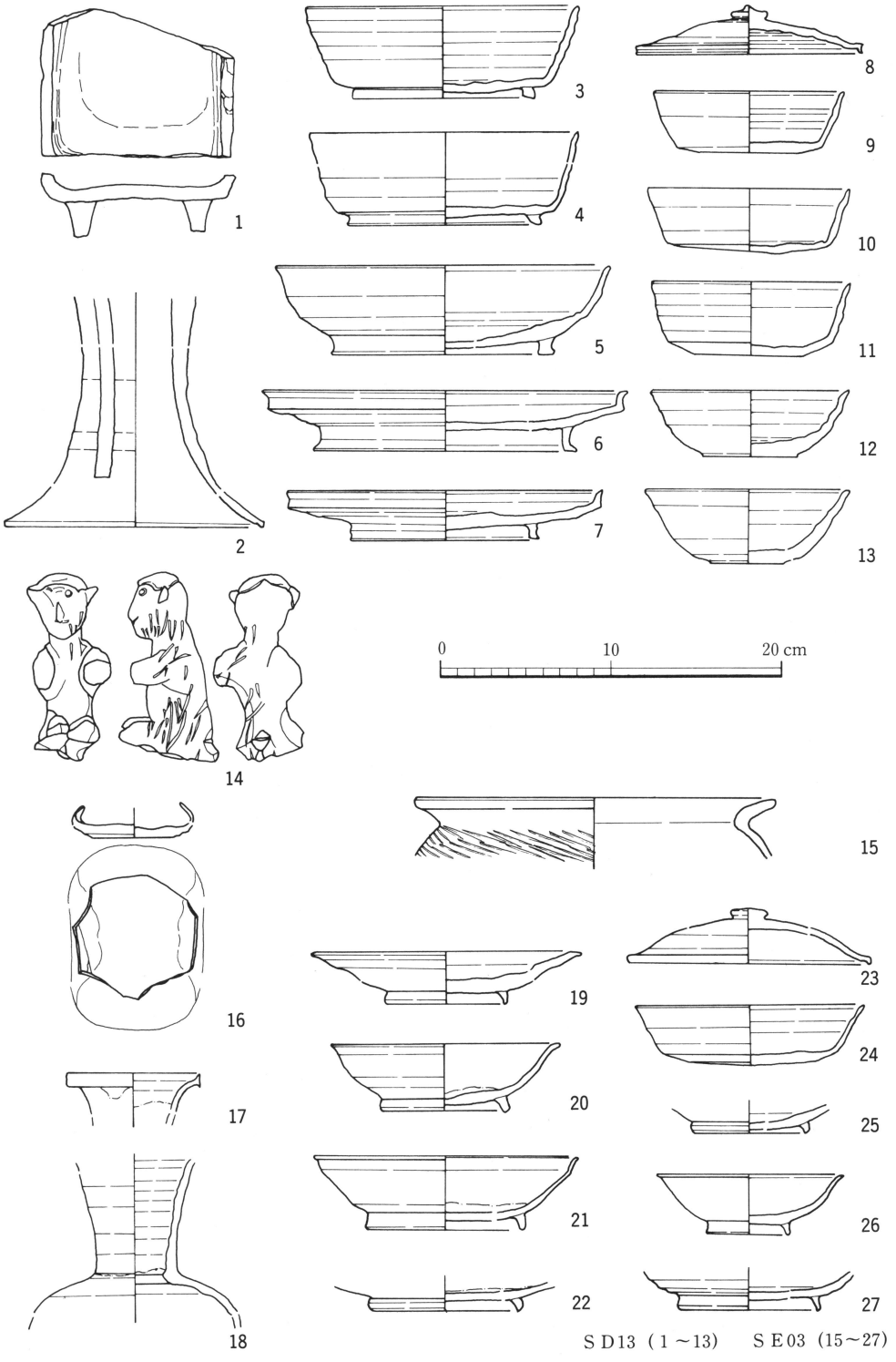
なお、調査の過程において楢崎彰一、大参義一、梶山　勝、斎藤孝正の各氏には有益な御教示を頂いた。文末ではあるが謝意を表する次第である。



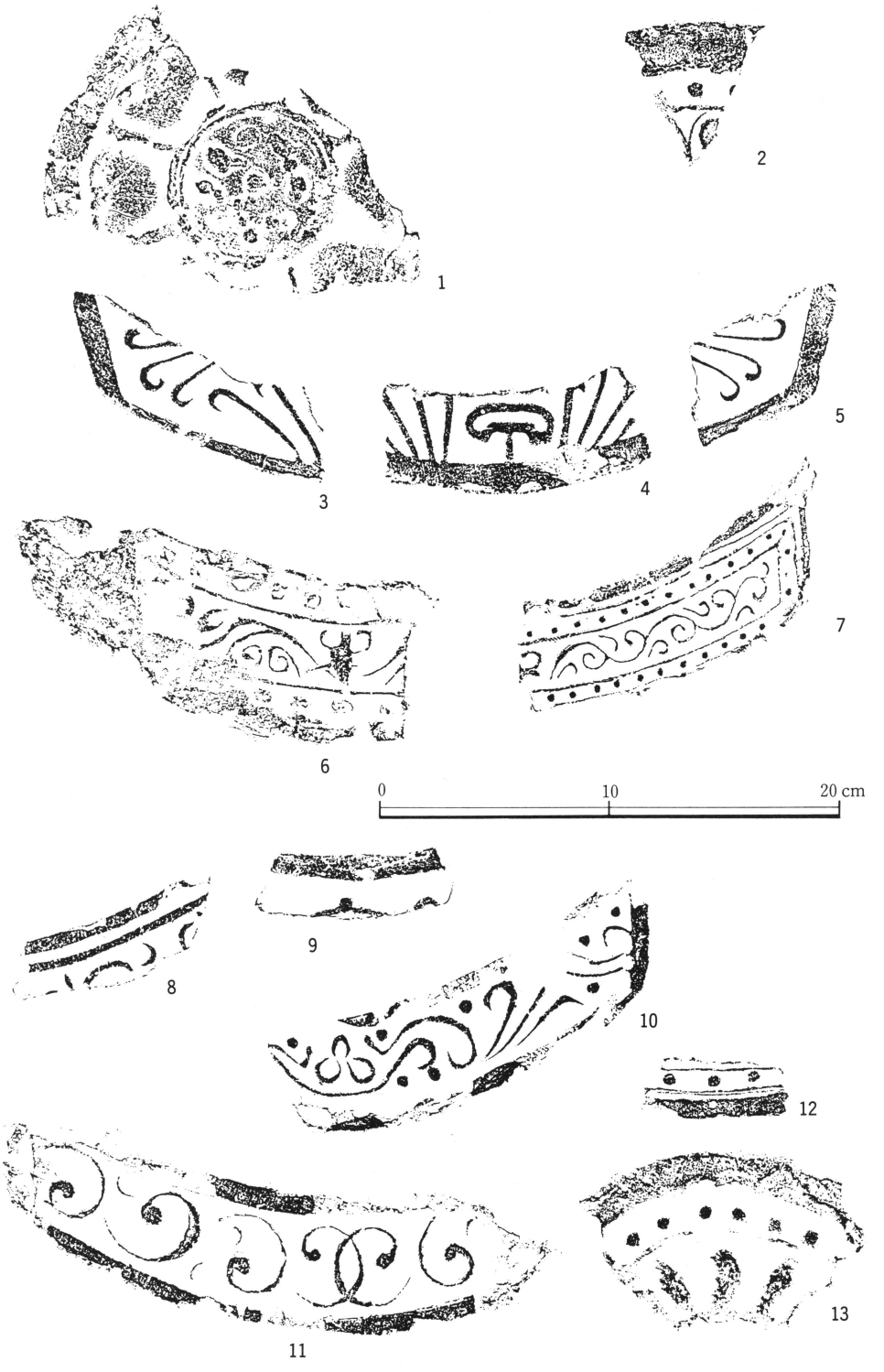
第５図　尾張国分寺　１：5000



Ｃ区全景（東から）



第6図　B期の遺物　1：4（ただし14は1：2）



第7図　軒瓦　1：3　　SD13（1～5）　SD30（6・7）
SE03（8～11）　SD45（12・13）

船橋宮裏遺跡（ふなはしみやうら）

調査の経過

船橋宮裏遺跡は稲沢市船橋町花の木・宮裏・市場にかけてひろがる遺跡であり、現状は標高３ｍの水田及び畑地である。遺跡の東側は「重本横地遺跡」が所在する微高地に連続している。また南には三宅川をはさんで「矢合城跡」が所在する。船橋宮裏遺跡は古代から中世の遺物散布地として稲沢市遺跡番号4－54として登録されているが、しかし本格的な調査は今回がはじめてである。調査は1991年11月～1992年１月にかけて県道稲沢祖父江線建設予定地内において実施した。調査面積は1600㎡であるが、工程の都合上Ａ・Ｂの調査区を設定し発掘調査を実施した。

調査の概要

遺跡の基本層序は、大きく３層からなる。第Ⅰ層は耕作土。第Ⅱ層は褐色シルトで、遺物を包含する。第Ⅲ層は黄褐色砂質シルトである。しかし、水田耕作地では第Ⅱ層の褐色シルトが削平されている。調査で確認された遺構・遺物は、そのほとんどが14世紀後半から15世紀前半のものであった。以下、今回の調査の中心となったＡ区の概要を述べる。

Ａ区は、調査区全域にわたって土壙群が点在しており、その分布は数基単位で一つのまとまりが存在する。調査区東半の土壙群は主軸を南北方向に置き、東西２群のまとまりをもつ。調査区西半の土壙群は東西に主軸を置いたもので、やはり２群のまとまりが存在する。これらの土壙はそのほとんどが隅丸長方形であるが、円形プランをもつものも数基確認され注目される。いずれの土壙も出土遺物をほとんど確認できなかったが、ただ１基のみ頸部を欠損した古瀬戸の壺を伴出している。この壺はほぼ直立状態で検出され、副葬品の可能性が高い。土壙の埋土は、層位堆積をもたず、若干の土質の差異は認められるもののいずれも斑土が充塡されていた。これは、人為的埋め戻し作業を想定させるものである。

土壙以外の遺構として溝数条、井戸２基、大型土壙１基、火葬施設５基等を検出した。溝のうち調査区中央付近の１条は、コの字状に屈曲して掘削されており、特定の原則に基づいて土壙群を区画したものと考えられる。調査区南東の大型土壙は、他の土壙に比べ楕円形でしかも長大で、長軸8.56ｍ、短軸3.20ｍ、深さ1.12ｍを測り層位堆積を有する。火葬施設は、長軸90㎝、短軸60㎝、深さ20㎝程度の小型のもので、骨片、炭化物、焼土で埋まっていた。この性格等については今後の課題である。以上の諸点から、この地は、14世紀後半から15世紀前半にかけて、近接する集落の墓域として存在したと考えられる。

（小塚俊夫）



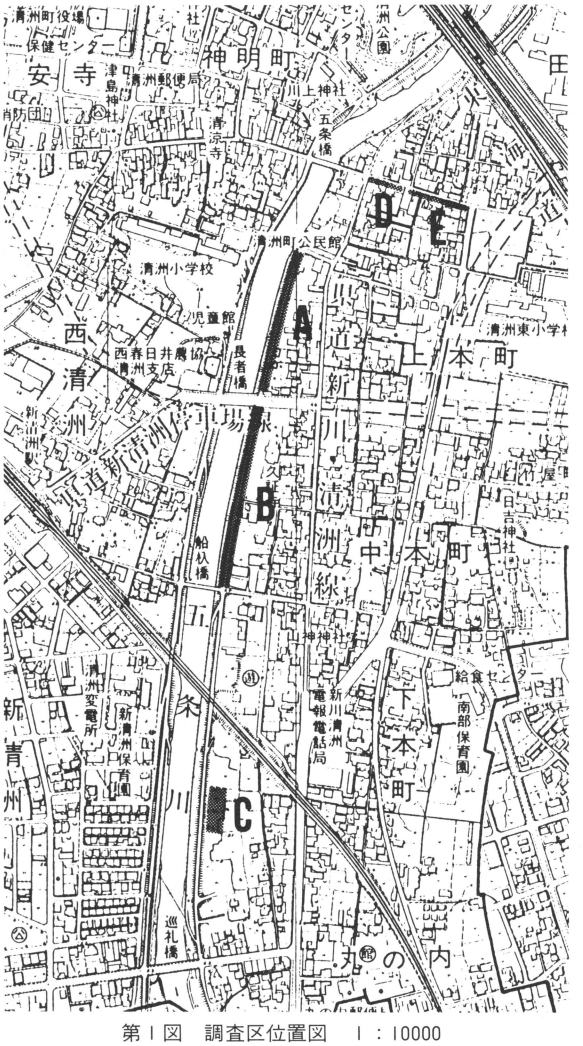
91 A 区全景

清洲城下町遺跡

調査の経過

清洲城下町遺跡は、濃尾平野の中央を南流する木曽川水系五条川の中流域に形成された自然堤防及び後背湿地上に展開する古代から近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は、昭和57年に名古屋環状２号線関連調査として開始されて以来、既に10年を経ようとしている。今年度は五条川改修関連調査（Ａ～Ｃ）4820㎡、県道新川・清洲線関連調査（Ｄ・Ｅ）847㎡の合計5667㎡について実施した。

五条川改修関連調査は、調査開始以来６年目を迎えるが、今年度は昨年度から着手した現堤防下の調査が本格化し、築堤以前の様相がかなり明らかとなった。遺構は、近世宿場町、清洲城下町前・後期の３時期に認められ、Ａ・Ｂ区では近世の溝や畑地、城下町後期の礎石建物などが検出された。また、Ｃ区では城下町外縁部の様相を垣間見ることができた。



第１図　調査区位置図　１：10000

一方、５年目を迎える県道新川・清洲線関連調査では、昨年同様、前述の３時期に加え奈良～室町時代の遺構・遺物が確認された。調査区が長狭なため、遺構の全形を確認することはできなかったものの、城下町期の礎石建物や奈良～室町時代の竪穴住居などが検出された。また、城下町期の焼土面や地震による断層・噴砂も確認されるなど、五条川東岸部の様相解明に向けて、数多くの知見を加えることとなった。　　（金子健一）

五条川河川改修関連（A・B・C区）

本年度の調査のうち、A区とC区について調査区ごとに概要を述べる。

A区　A区は清須城中堀の直ぐ南に位置し、現在の堤防下の部分を調査した。基本層序は、上位からⅠ層：表土、Ⅱ層：1794年の瀬違えに伴う堤防本体の砂層、Ⅲ層：清須城廃城以降の盛土層、Ⅳ層：天正地震による噴砂層、Ⅴ層：城下町期前期の包含層（このなかには幾度かの洪水による堆積層が確認される）、Ⅵ層：ベースであるシルト層と堆積する。調査は、Ⅲ層（盛土層）の上面で宿場町期前期、Ⅳ層（噴砂層）の前後で城下町期後期および城下町期前期の後葉、Ⅵ層（ベース）で城下町期前期の遺構群をそれぞれ確認した。ここでは、城下町期後期・宿場町期前期の2時期について記述する。

城下町期後期の遺構としては、礎石建物、配石遺構、溝、井戸、廃棄土坑などがある。礎石建物は調査区のほぼ全域で確認され、空白地には廃棄土坑が掘削されている。礎石建物の中には、柱間がおよそ60cmの3間×5間の総柱建物が1棟存在し、付近の廃棄土坑から狛犬が出土したことからこれは祠跡と推定できる。また、これまでの調査例で検出したような屋敷割りの溝・堀・柵列は明確に確認できなかった。この地点の性格は現在検討中の課題である。

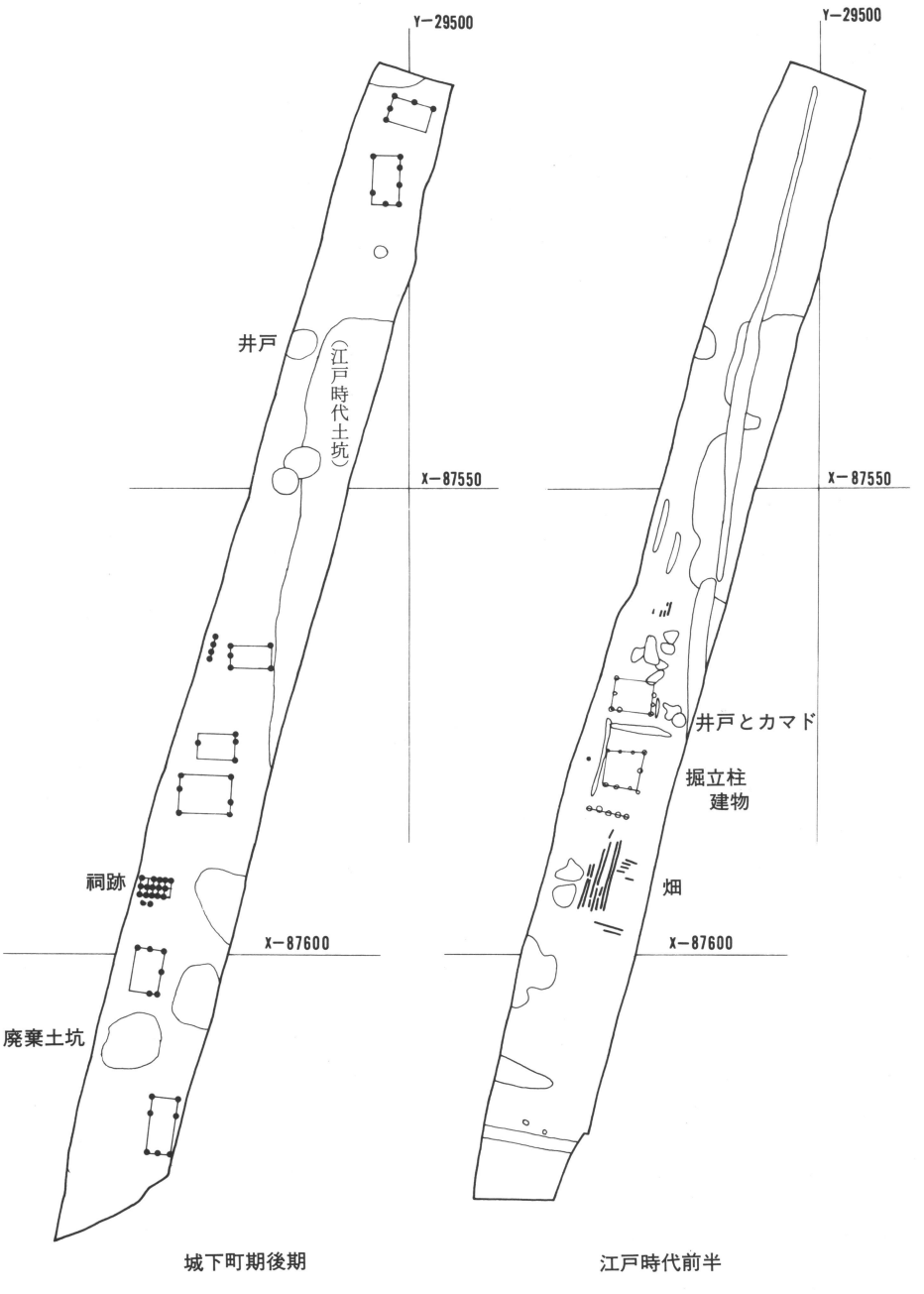
宿場町期前期の遺構には、掘立柱建物、溝、井戸、畝状遺構、廃棄土坑などがある。区画を現す溝は、現流路にほぼ平行する方位とほぼ南北に走る方位の2者に分けられるが、これらは道路の側溝の可能性が考えられる。また、この区画溝に直交する形の区画溝・柵列も存在し、これらの境界で区分された区画には、掘立柱建物・井戸・廃棄土坑が配置される区画と畝状遺構が展開する区画の2種類が認められる。遺構の在り方から短冊型地割を形成していたと想定できる。また、最大長が30mを越える不定形の巨大な廃棄土坑も確認でき、この中から18世紀後半の遺物や礫などが出土している。性格は不明。



A区全景



A区宿場町期の屋敷


Y−29500
井戸
（江戸時代土坑）
X−87550
祠跡
X−87600
廃棄土坑
城下町期後期
Y−29500
X−87550
井戸とカマド
掘立柱
建物
畑
X−87600
江戸時代前半

第２図　Ａ区遺構図

C区

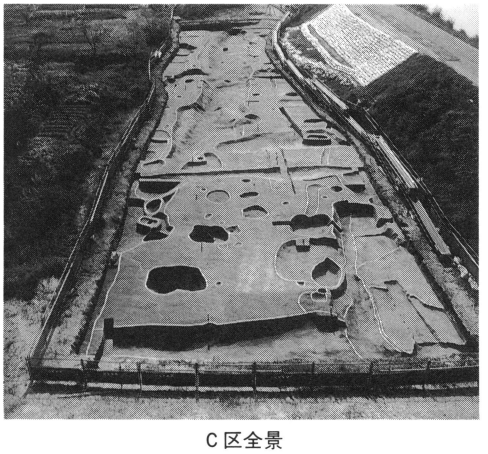
調査区は清須城本丸跡から約1.5km南に位置し、城下町の南端部に該当する。遺構は城下町期後期と鎌倉時代のものがある。

城下町期後期の遺構は井戸、溝、廃棄土坑、ピットなどがある。溝は東西方向に走るものが2条（SD01、SD02）存在し、その間隔は14mを計る。また、これに直行する溝も一条検出されており、この3本の溝で囲まれた区画が認められる。この区画の内部には、柱穴と思われるピットが数基、中央部に井戸が2基、区画溝に隣接した場所に廃棄土坑などが配置されている。この区画はこれまで調査した地点と合わせて考えると、東西方向に長い短冊型地割の屋敷地の一部分であると言えよう。

東西方向に走る溝SD01の南は、不定形の土坑などがみられる。この土坑からは円礫、陶磁器などのほかに骨片が出土している。特に、SK22では、散在する径20cm程度の円礫の直下から骨片が発見されている。骨片は白色で非常に細かい破片となっており、焼骨の可能性も考えられよう。この部分では、井戸や建物など生活の痕跡を示す遺構が無いことも考え合わせると、墓域となっていた可能性が高い。

鎌倉時代の遺構は幅5mの溝が1条存在するのみである。平面形は直線的ではなくやや不定形で、南から北に向かって水が流れるように傾斜している。最下層から12世紀中頃の灰釉系陶器の椀が出土しており、この段階に掘削されたものと考えられる。またこの溝の埋土上に天正地震の噴砂が堆積しており、16世紀には埋積したものであろう。中世における開発に伴う用水路という性格が想定できよう。

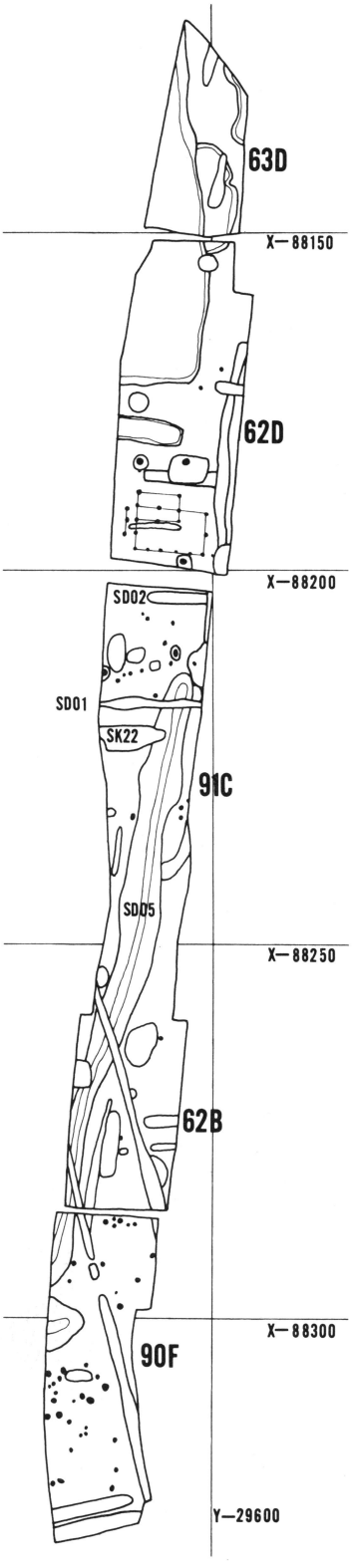
出土遺物は、城下町期後期に位置付けられるものが大半を占める。1は天目茶椀、2は長石釉の皿、3は内面に同心円文の入った無釉の皿、4は染付の皿、5・6は向付、7・8は土師器の鍋、9は擂鉢である。



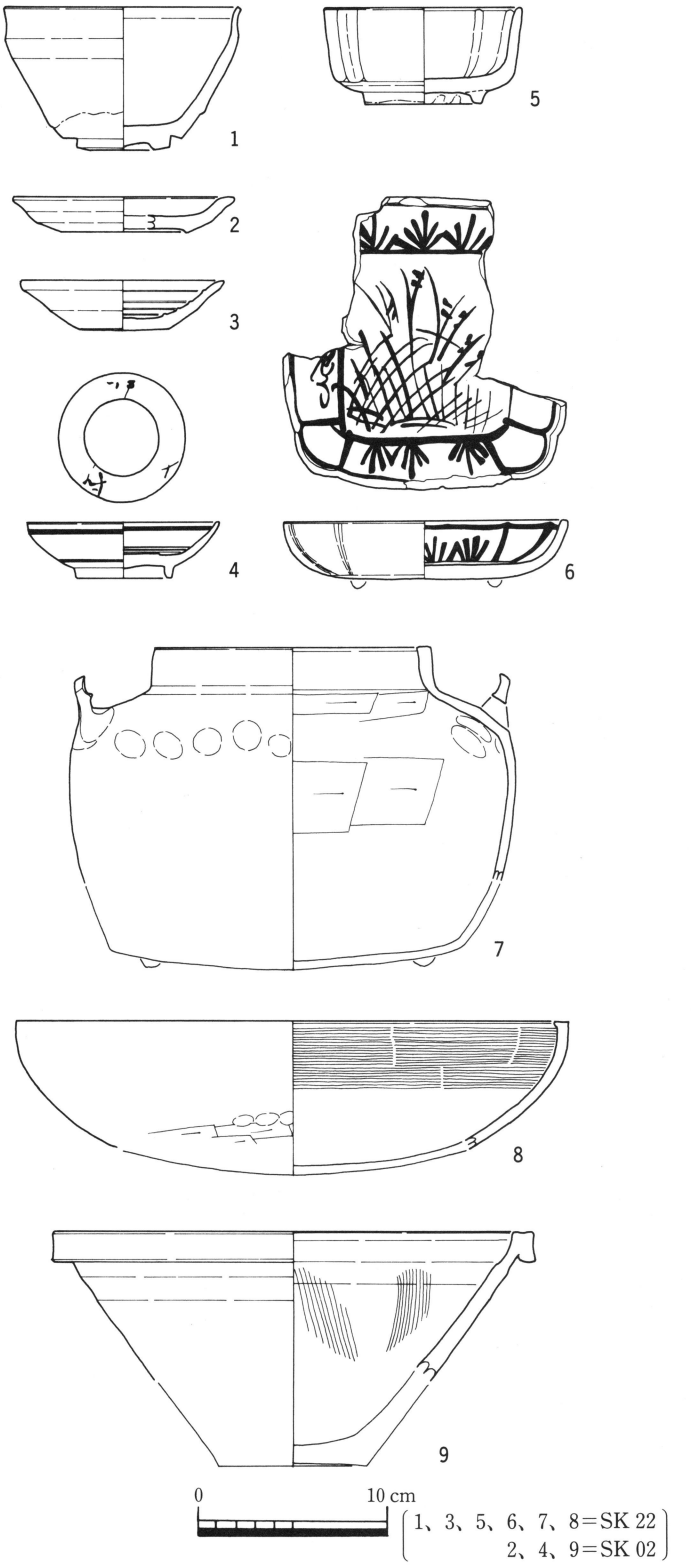
C区全景



C区骨出土状況



第 3 図　遺構図



1、3、5、6、7、8＝SK 22
2、4、9＝SK 02

第 4 図　出土遺物

県道新川清洲線関連（D区・Ea区・Eb区）

調査区は、五条川の流路に対して垂直にトレンチを掘削した形となった。流路に近いD区では旧五条川が検出され、最も遠いEb区では五条川左岸の安定した自然堤防が形成されていた。旧五条川は16世紀中頃に埋積したものと考えられ、戦国時代後半以降の遺構は調査区全域に見られた。しかし、D区や自然堤防の縁辺部にあたるEa区では、戦国時代以前の良好な生活面や遺構は存在しなかった。

検出した遺構は、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代、城下町期前期（戦国時代）、城下町期後期（戦国時代～江戸時代）、江戸時代後期の5時期に大別できる。

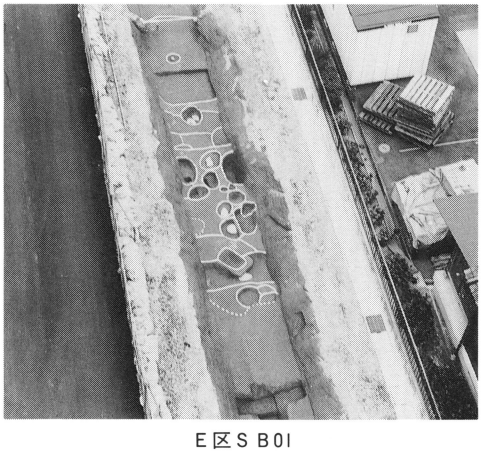
奈良・平安時代の遺構はEb区で竪穴住居8棟、溝3条、土坑などが確認された。竪穴住居は切り合い関係を持ち、複数の時期に細分が可能である。SB302からは須恵器杯蓋（1）・杯身（2）・土師器甕（3）が出土し、8世紀中頃に比定できる。

鎌倉・室町時代の遺構としては、Eb区の東端部でピット群を検出した。現在の地割に平行する形で配列するものも見られ、掘立柱建物あるいは柵列が存在していたものと推定される。14世紀代の灰釉系陶器が出土している。

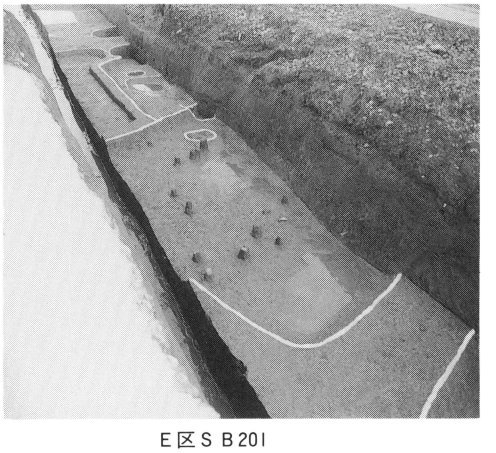
城下町期前期は、更に旧五条川埋積前後で時期細分が可能である。旧五条川埋土中からは窖窯後期～大窯II期の遺物が出土した。旧五条川埋積後には礎石建物1棟・区画溝1条・廃棄土坑などが存在する。なお、この生活面は天正地震の噴砂に覆われ、1586年よりも遡ることが確認できる。

天正地震の噴砂を覆う形で焼土面が一部で検出され、城下町期後期の廃棄土坑などがこの面から掘り込まれている。しかし、建物や屋敷割りの遺構は確認できなかった。

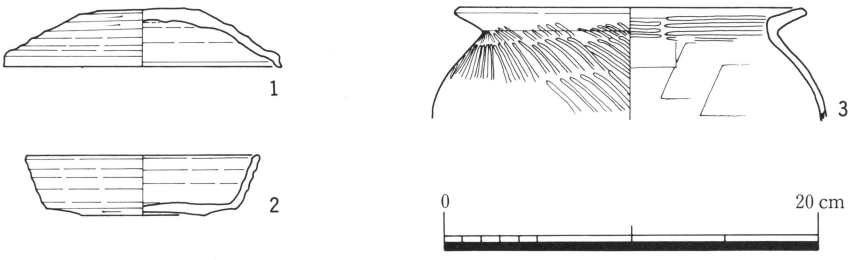
江戸時代の遺構は、D区で井戸と推定される土坑が若干認められた。宿場町期後期の時期に該当するものと思われ、町屋復元の一助となるであろう。



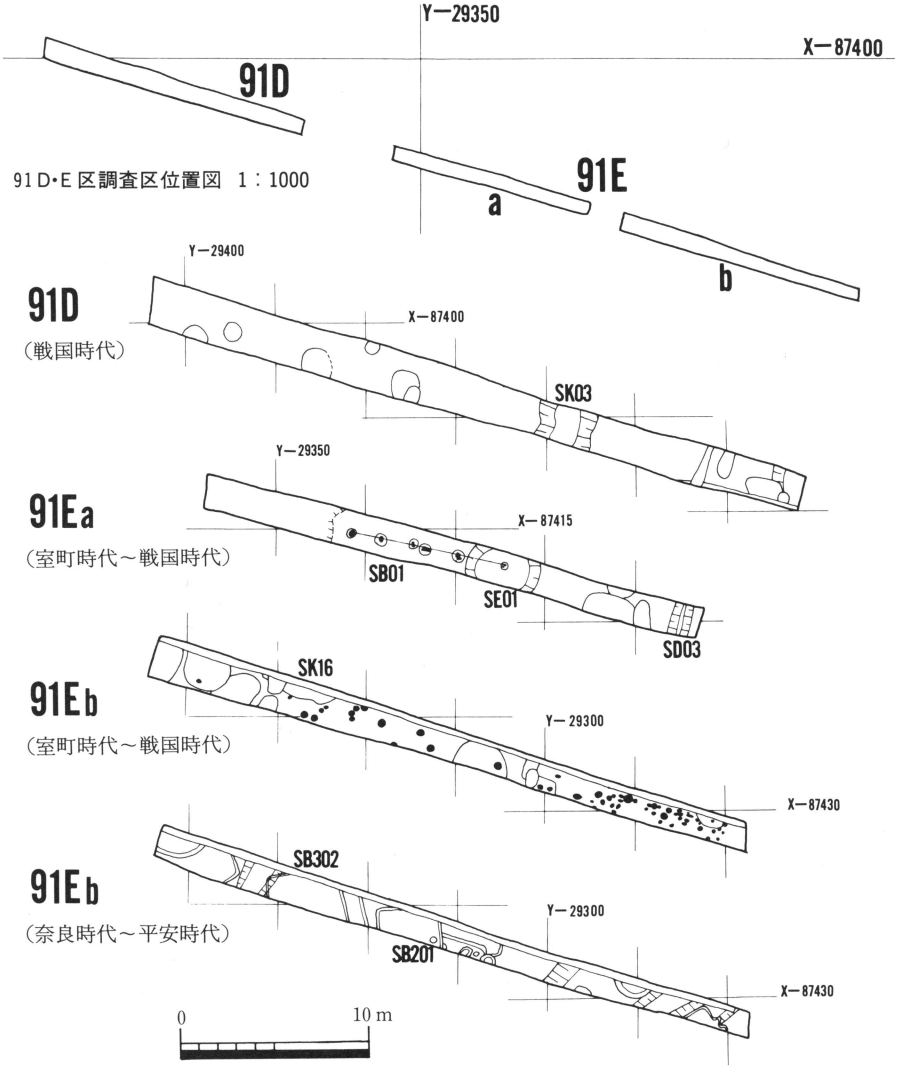
E区SB01



E区SB201



第５図　ＳＢ302出土遺物



第６図　91Ｄ・Ｅ区遺構図

まとめ

今年度の清洲城下町遺跡の調査は県道新川清洲線関連の調査（847㎡）と五条川改修関連の調査（4,820㎡）である。前者の調査区はほぼ東西方向で幅が約４ｍ前後と狭いものであったが、長さが150ｍにわたって設定された。一方、後者の調査区は３地点に分かれているが、五条川左岸に沿ってほぼ南北方向に計500ｍの長さにわたって設定された。その結果、清洲城下町の南半分を縦横に断ち切って調査した形となり、種々の興味深い事実を得ることができた。

県道新川清洲線の調査区においては古代から近世までの連綿とした人間生活の痕跡を見い出すことができた。下層では古代・中世の集落が見つかった。城下町期では調査区の西端で天正地震（1586年）と思われる噴砂に覆われる形で旧五条川の川岸を検出したが、当初の予想よりかなり東側に入り込んでいたことが確認された。

五条川関連の調査区ではＡ区、Ｂ区が現在の堤防下ということで、五条川瀬替え（18世紀末）以降の攪乱を全く受けておらず、きわめて良好な形で遺構を検出することができた。特筆されるのはＡ区における城下町後期の様相である。Ａ区ではこれまでの調査区でなかったような所見がいくつか見られた。一つには数棟の礎石建物群を検出したことである。礎石建物群は方向もほぼ同一で、かなり規則性を持っている。そのうちの１棟は総柱建物で、すぐ南の廃棄土坑から狛犬等も出土していることから「お堂」の様な建物とも考えられる。出土する遺物も従来の調査区のものと違い、廃棄土坑などからは志野、織部といった瀬戸・美濃産の茶陶類に加えて東南アジア産と考えられる陶器や中国・朝鮮産の白磁・染め付けなどかなり質の高い陶磁器がまとまって出土している。さらに、今までの調査区でよく検出されている区画溝がほとんど見られない点も特異である。一つの大きな区画の中なのか、区画する必要のなかった場であるのか興味深いことである。位置的には中堀の虎口（出入口）を出たすぐ正面に当たることなどから、従来考えていたような通常の屋敷地とは違った空間であった可能性が高い。それ以外に、城下町前期では多数の井戸と一辺約45ｍの区画溝で囲まれた武家屋敷地をいくつか検出している。

南のＣ区では屋敷を区画する溝が数条検出されているが、それより以南は不定形の土坑などが見られ、中には円礫と共に骨片などが入っているものもあった。

今年度の清洲城下町遺跡の調査は今までの中で最も広い調査区を調査し、種々の興味深い事実を得た。これで、五条川関連の調査面積はすでに４万㎡を超え、予定面積のほとんどを終了したこととなる。この間、検出した多数の遺構・遺物の一つ一つがそれぞれの時代の人々の営みの断片を豊かに想起させてくれる。今や、これらの断片をつなぎ合わせ、生き生きとした人間生活を復元する時期にきていると言えよう。　　（城ヶ谷和広）

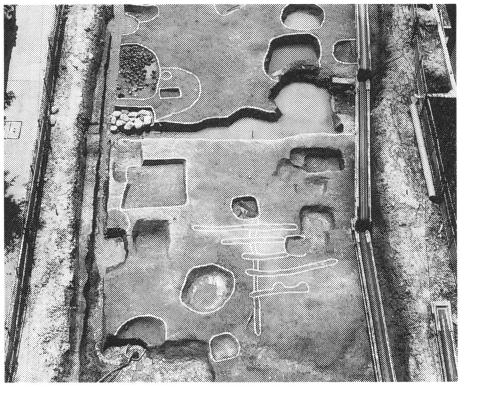
外町（そとまち）遺跡

調査の経過

外町遺跡は、尾張平野の中央部を南流する五条川左岸の標高約３ｍ前後の自然堤防帯上に立地し、行政的には、西春日井郡清洲町・新川町の境界付近に位置する。遺跡は中世以降の美濃街道に面しており、北方には清洲城下町遺跡が広がる。

今回の発掘調査は、県道新川・甚目寺線建設に伴うものであり、平成３年４月から８月まで、1890㎡にわたって調査を進めてきた。

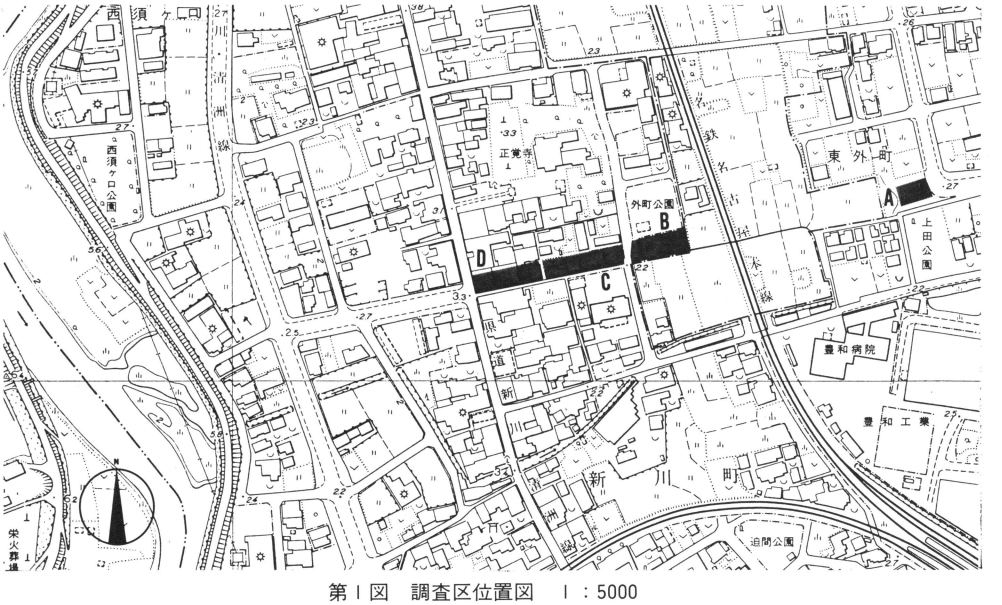
調査は、地下水位の上昇期にあたり夥しい湧水に悩まされ、作業は難航したが、その結果、Ａ区では、城下町後期に属する溝を、Ｂ～Ｄ区においては、18世紀代を中心とした良好な遺構・遺物の出土をみた。　（服部信博）



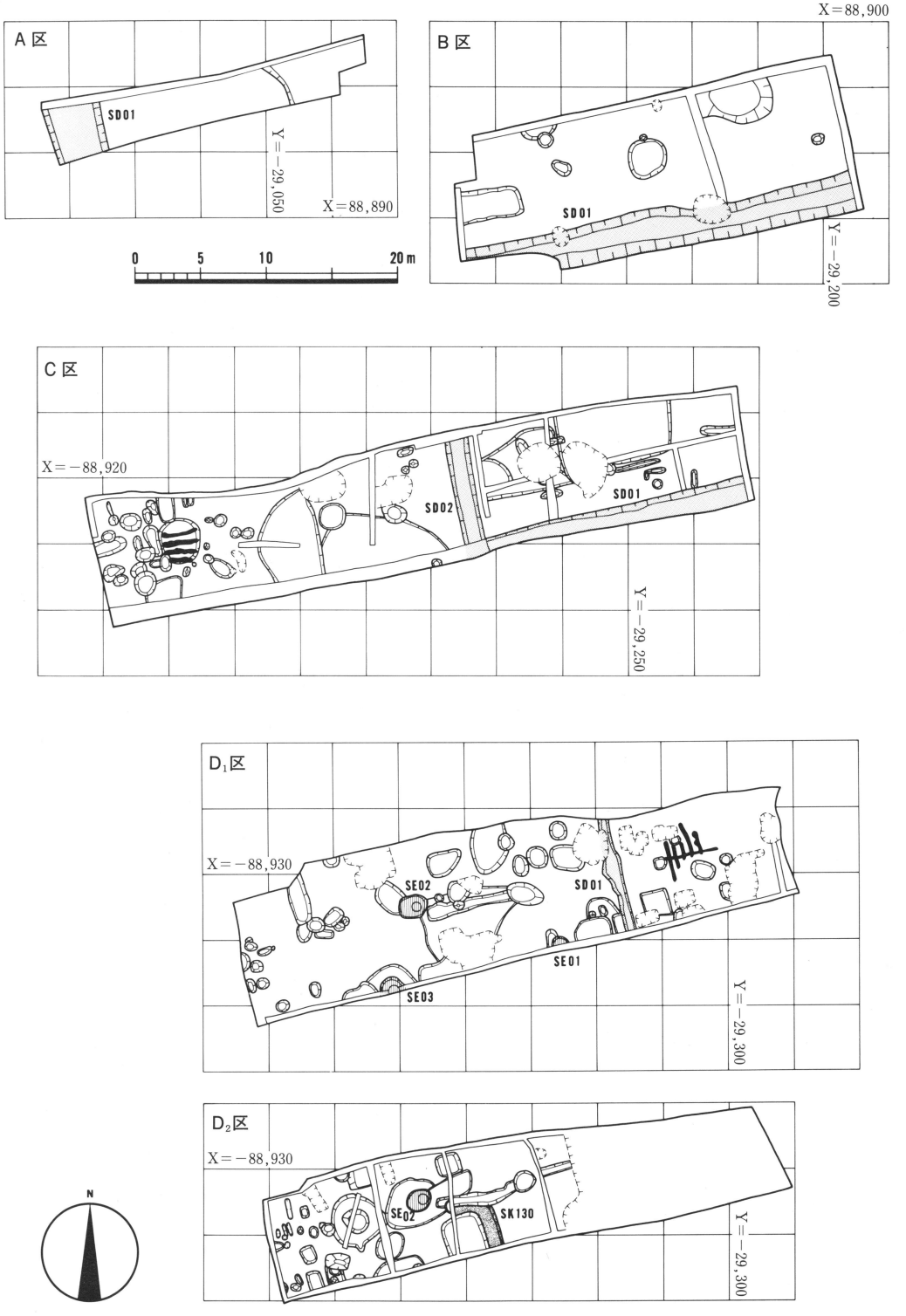
D_1区東半（東より）



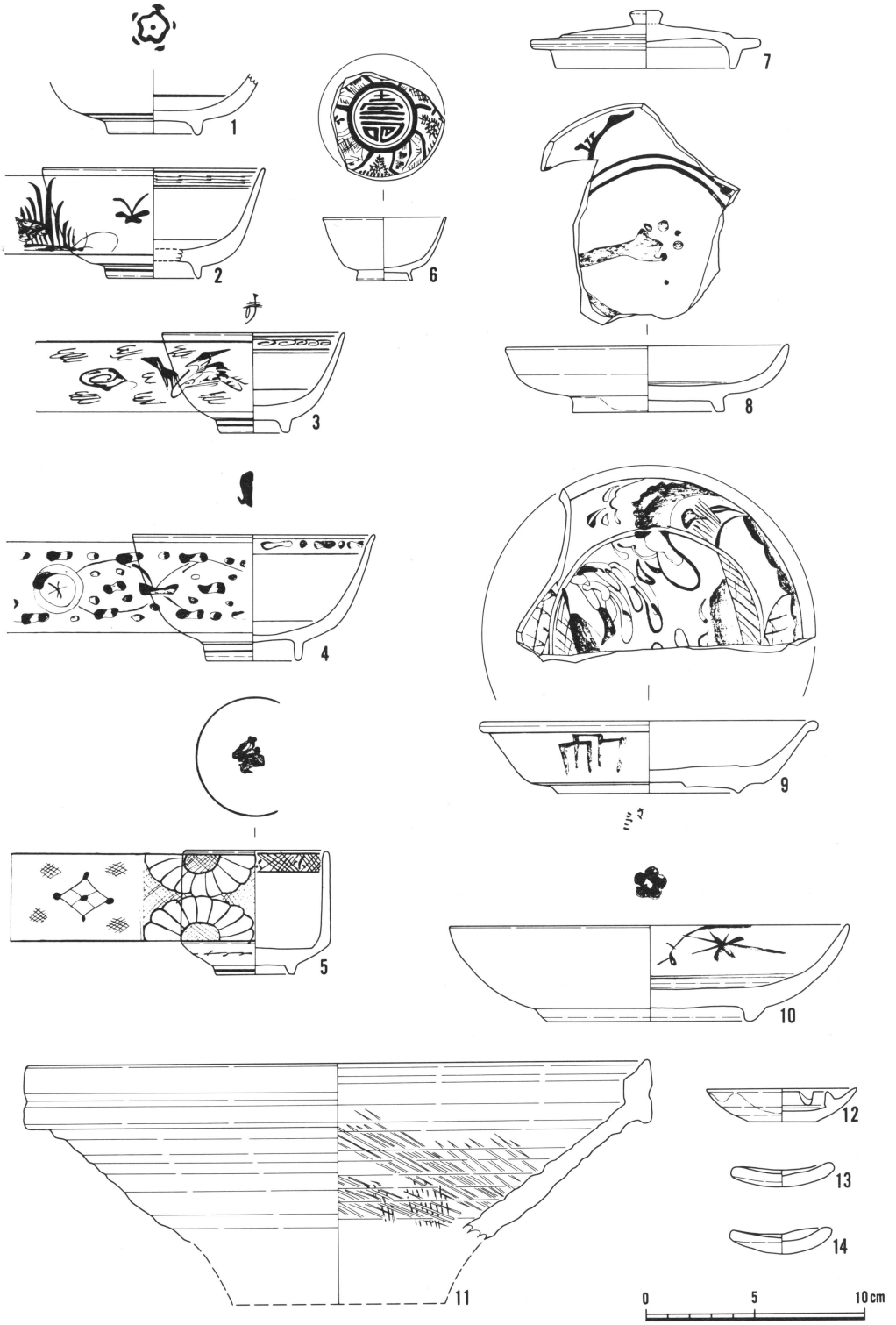
D_2区全景（西より）



第Ⅰ図　調査区位置図　Ⅰ：5000


A区
SD01
Y=−29,050
X=88,890
0 5 10 20m
X=88,900
B区
SD01
Y=−29,200
C区
X=−88,920
SD02
SD01
Y=−29,250
D1区
X=−88,930
SE02
SD01
SE01
SE03
Y=−29,300
D2区
X=−88,930
SE02
SK130
Y=−29,300
N

第2図　遺構配置図



〔1～10、12はB区SD01
11、13、14はA区SD01〕

第3図　出土遺物

調査の概要

今年度はA～D区の4調査区にわたって調査を行った（第1図）。

遺構（第2図）

A区　清洲城下町最末期頃（17世紀初頭）と思われる溝1条を検出した。

B区　江戸時代後期（18世紀末～19世紀前半）の溝1条・土坑7基・ピット2基を検出した。SD01は、用排水路と思われる。

C区　この調査区は、攪乱が多く正確に遺構を掴みきることが難しかった。江戸時代後期頃と思われる溝10条・土坑59基を検出した。そのうちSD01・02は用排水路と考えられ、調査区西端では畑の畝と思われるものも検出された。

D区　現在の美濃街道に面したこの調査区は、住居跡などの遺構が期待されたが攪乱が多く明確には確認できなかった。上面（D_1区）では、江戸時代後期頃の井戸3基・溝8条・土坑48基を検出した。そのうちSD01は用排水路と考えられ、調査区東端では畑の畝と思われるものも検出された。上面検出面より約1mの包含層の下の下面（D_2区）では、新たに江戸時代中頃（17世紀末～18世紀前半）の溝3条・土坑39基・ピット2基を検出した。特にSK130では、山茶椀の破片が出土し室町時代の土坑であることが確認された。

遺物（第3図）

出土遺物としては、江戸時代後期を中心とした瀬戸・美濃産の陶磁器類が大多数を占めている。1～4は染付けの椀、5は染付けの筒型湯呑椀、6は内面に模様をもつ小椀、7は灰釉のかかった陶器の蓋、8～10は染付けの皿、12は鉄釉のかかった灯明皿である。

また、A区では清洲城下町最末期頃の遺物が出土しており、11は備前焼の擂鉢、13・14は土師器の皿である。

その他、甕・蓋・杯などの須恵器も、表土や包含層、遺構内から出土している。

まとめ

A区では、清洲城下町最末期頃の溝が確認されており、北方に広がる清洲城下町が拡大膨張して外堀の外側にも町を形成していた可能性が高いと思われる。

B区～D_1区では、江戸時代後期頃の町の様子を伺うことができる。D_1区SD01以西は井戸を検出しており居住地と、D_1区SD01以東C区SD02以西までは畝を検出しており畑地と、C区SD02以東B区までは田地であったのではないかと考えられる。

D_2区では、江戸時代中期には人々の住んでいた形跡がみられるが、約1mの盛土が18世紀後半に行われているようであり、『清洲町史』にみられる五条川瀬違え（1794）と時期が一致しており、この時期この地域に瀬違えに伴う町割りの再編という人為的な造成のあったことが想定される。　（小嶋廣也）

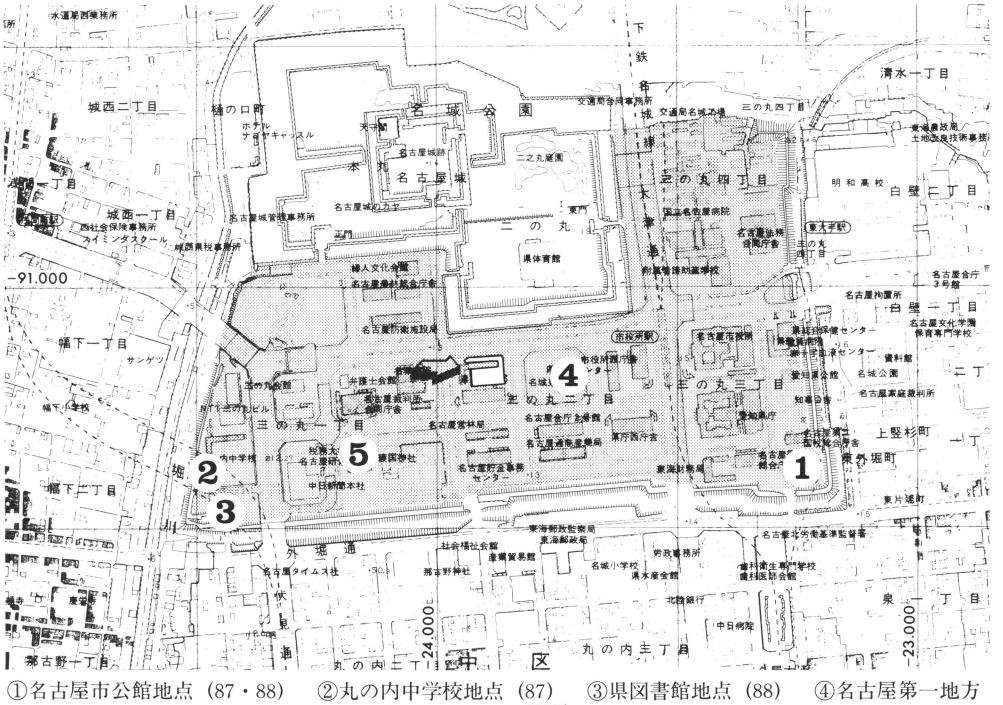
名古屋城三の丸遺跡

調査の経過

名古屋城三の丸遺跡は、名古屋市中区三の丸地内に所在する弥生時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。これまでに、第１図の５地点で発掘調査が実施された。平成３年度の調査は、愛知県警察本部内の、総合科学センター建設予定地3,600㎡で実施された。調査の結果、上下２面にわたる遺構が検出され、下面では戦国期の那古野城の一画が、上面では近世尾張藩における上級家臣の武家屋敷地が確認された。

戦国時代の遺構

戦国時代の主な遺構としては、堀・柵列・井戸・方形竪穴建物跡などがある。縦横に走る堀は全部で６条あり、大きいものでは幅４ｍ・深さ3.5m、小さいものでも幅2.5m・深さ２ｍを測る。いずれも断面形が鋭いＶ字状を呈する薬研堀で、堀際には土塁を伴っていたと考えられる。このような堀と土塁の配置構成や出土遺物などの検討から、これらは名古屋城二の丸にあったとされる、織田信秀・信長父子が居城した那古野城の一画を構成する郭群と考えることができる。また、円筒状に掘り込まれた桶組み井戸や、貯蔵庫か台所と思われる焼失した方形竪穴建物跡も確認され、注目された。　　（鷲見　豊）



①名古屋市公館地点（87・88）　②丸の内中学校地点（87）　③県図書館地点（88）　④名古屋第一地方合同庁舎地点（88）　⑤簡易・家庭裁判所地点（90）　□は三の丸遺跡の範囲　（　）内は調査西暦年

第１図　三の丸遺跡と今回の調査地点（矢印）



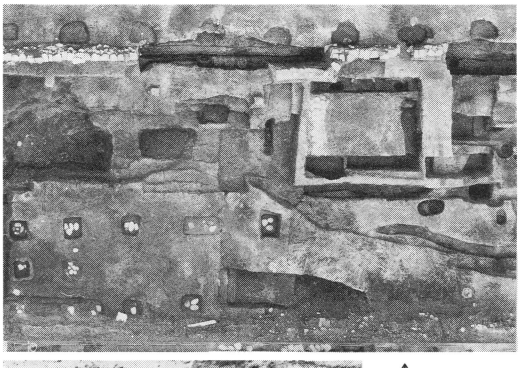
第2図　戦国時代の遺構略測図

江戸時代の遺構・遺物

今回の調査区は、尾張藩上級武士の屋敷地であり、調査によって屋敷境Ａ～Ｃが検出された。屋敷境Ａは、17世紀半ばに家老の竹腰氏が屋敷を構える以前に、この土地を東西に分けていた境界施設で簡単な柵列である。屋敷境Ｂは、竹腰氏の屋敷地の南境と考えられるが、簡単な柵列から塀と溝、さらに支柱をもち一部には石積み基礎をもつ瓦葺きの土塀へと変化したと思われる。屋敷境Ｃは、家老職級の家臣山澄氏の屋敷地と、幕末には熊谷氏が拝領していた屋敷地の境で、深く箱掘りされた溝である。これらの屋敷境の構造とその変化は、江戸時代の武家屋敷での境界に対する意識を考察する資料となろう。また屋敷境周辺から発見された井戸・廃棄土坑・建物跡などは、屋敷内の土地利用の有りかたを考える手掛かりを与えた。

遺物は、陶磁器・瓦類を中心にコンテナ1,000箱以上が出土した。中でも、三ツ葉葵の一部をかたどった金箔、漆器にほどこされた美しい蒔絵細工、家紋の入った瓦などは、膨大な量の陶磁器類とあわせて、江戸時代に三の丸に居住していた上級武士の暮らしぶりや経済力を伝えるものである。

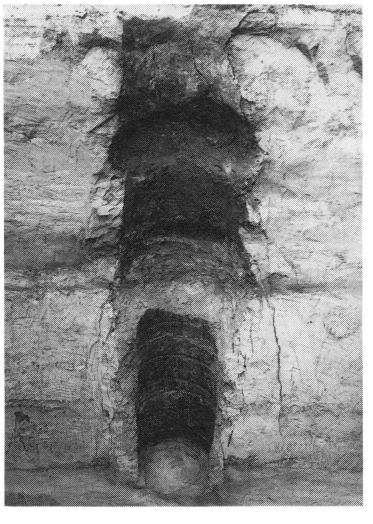
（余合昭彦）



↑
瓦葺き建物及び
土蔵の基礎

屋敷境の石組基礎と溝→

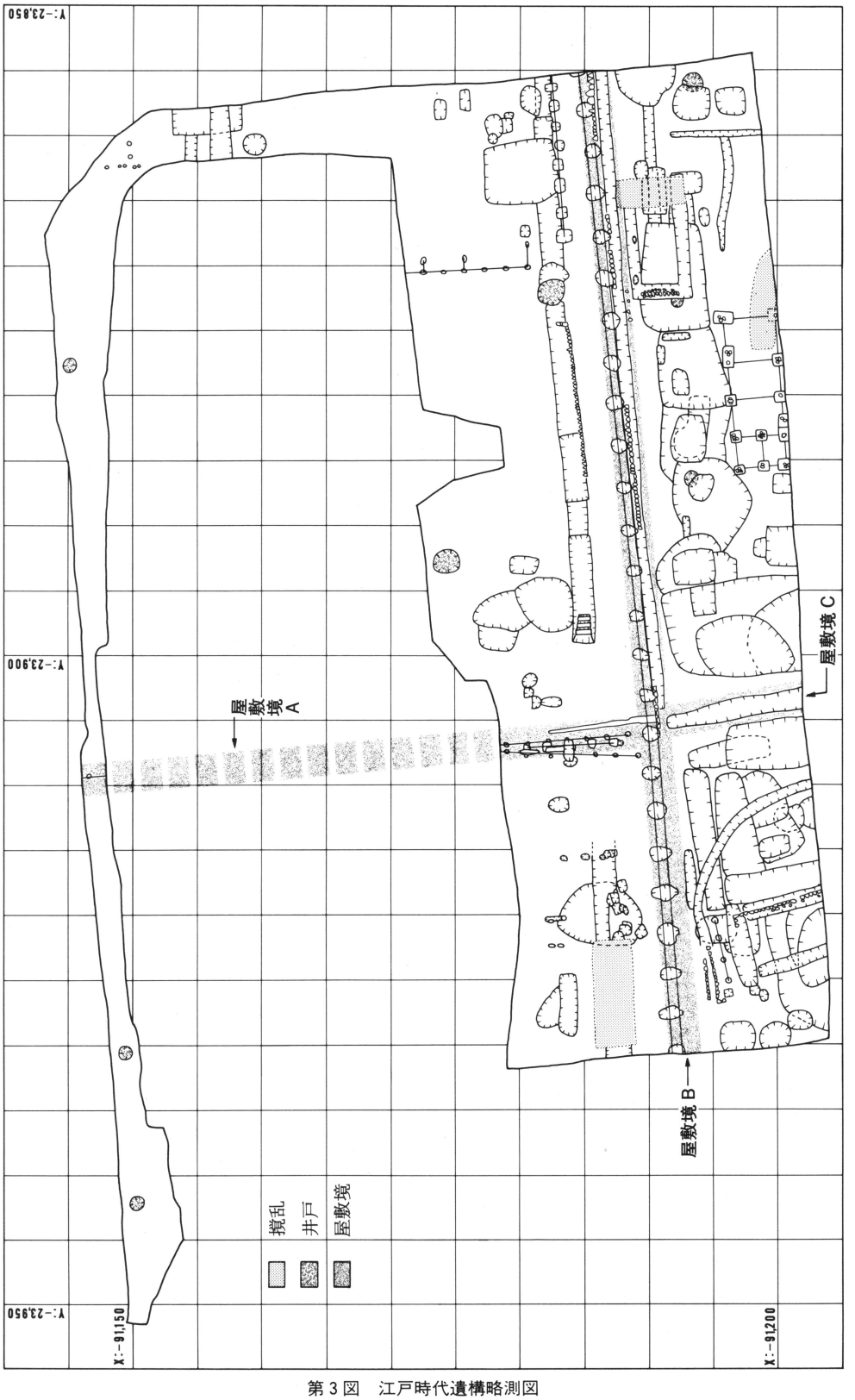




戦国時代の桶組み井戸←

方形竪穴建物跡
↓





第3図　江戸時代遺構略測図

松河戸（まつかわど）遺跡

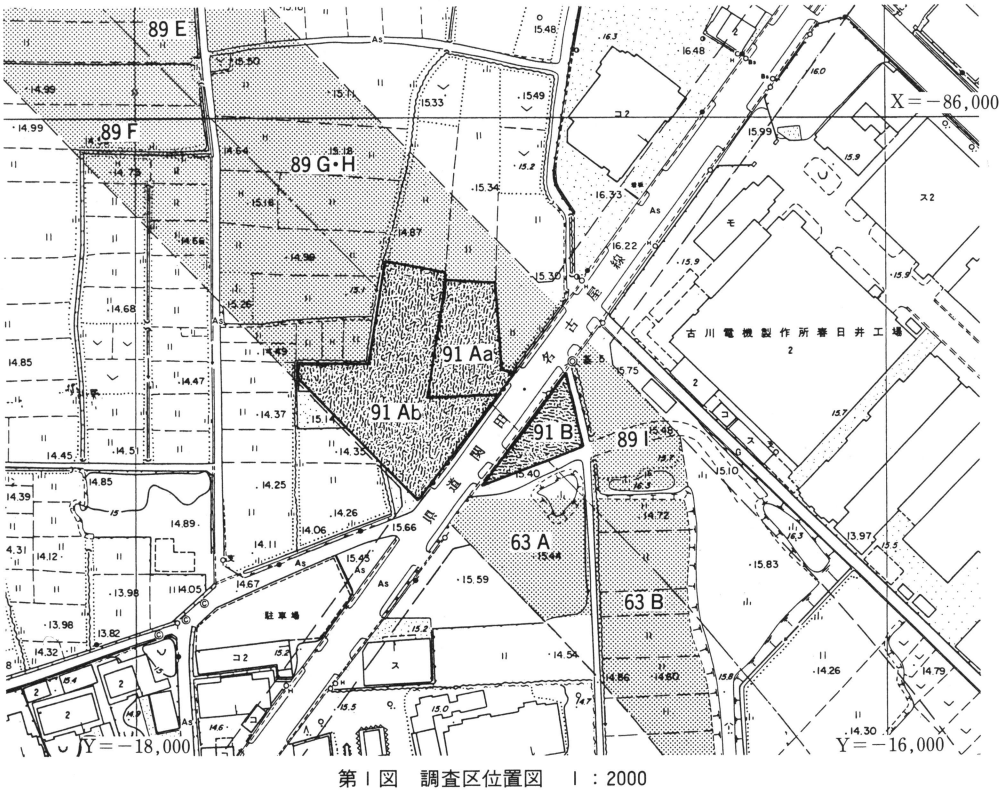
調査の経過

松河戸遺跡は春日井市南東部、庄内川右岸の沖積地に立地する。この一帯は古代条里制の残存する地域と推定されており、名古屋環状２号線建設に伴い条里制遺構究明を目的として昭和62年度から始まった発掘調査は、５年目となる今年度を以て終了した。これまでの調査によって本遺跡を、Ⅰ期：縄文時代早期～後期、Ⅱ期：縄文時代晩期後半～弥生時代前期、Ⅲ期：古墳時代、Ⅳ期：中世、Ⅴ期：近世の５時期に区分している。

調査の概要

今年度の調査は県道関田・名古屋線を挟んで西に91Ａ区、東に91Ｂ区の２調査区が設定されたが、91Ａ区は都合上２分割（91Ａａ区、91Ａｂ区）した（第１図）。

調査は上下２面で行った（第２図）。上面はⅤ期で、水田遺構を主とするが、攪乱が激しくＡａ区を除き検出できなかった。Ｂ区では溝１条（ＳＤ03）を検出している。下面はⅣ期の屋敷跡を検出した。ＳＡ01を屋敷地南限としその南に井戸（ＳＫ02）を配置し、さら



第Ⅰ図　調査区位置図　Ⅰ：2000

にその南では溝（ＳＤ02）により区画されている。12世紀後半～13世紀前半に比定される。その他、本遺跡の時期区分に該当しない遺構としてＳＤ01（７～11世紀　仮にⅢ′期とする）がある。埋土に粗砂層を数枚持つことから水路と考えられる。

まとめ

名古屋環状２号線建設工事が調査区両脇まで迫り、時に競合する場合もあり、決して満足のいく調査ができたとは言いがたい。また、遺構面の攪乱が激しく、屋敷跡の様相が摑みにくくなっていたことが残念でならない。本遺跡の調査は67,000㎡を越える調査面積の全てを終了し多くの成果を上げた。今後の整理報告に期待したい。　　（岡本直久）



第２図　遺構配置図

室（むろ）遺跡

調査の経過

建設省中部地方建設局名四国道工事事務所により国道23号線の交通量緩和を目的として国道23号線バイパスの建設が計画された。それを受けて愛知県教育委員会文化財課は、昭和62年に建設予定地内で試掘調査を実施した。その結果、室遺跡は、西尾市の東部、駒場町と室町にまたがる広田川左岸の自然堤防上（標高5.5m）に立地し、古代から中世にかけての遺跡であることが明らかになった。調査は、建設省名四工事事務所の委託を受け、平成３年４月から４年３月までの予定で8,800㎡を発掘した。発掘区はほぼ東西にわたり、幅40m、長さ220mである。（山田　基）

調査の概要

上層から①耕作土層②近世の遺物をわずかに包含する明褐色土層③平安時代後期から中世にかけての遺物を多量に包含する暗茶褐色土層の順に堆積し、これが調査区全域に通有の基本層序である。暗茶褐色土層の下は、調査区東半部では自然河道のもたらした褐色砂層や流木を含む腐食土層が厚く堆積するに対し、西半部では平安時代前期から中期の遺物をわずかに含む黄褐色シルト層と青灰色シルト層があり、ついで無遺物層である黒色粘土層が堆積し、様相を異にする。中世の基盤面は褐色砂層と黄褐色シルト層の上面であり、木樋はこのシルト層と粘土層の間で検出された。

以上の層序と遺構の構造を考えて次の画期を設定した。すなわちⅠ期（平安時代前期から中期）、Ⅱ期（平安時代後期から中世）、Ⅲ期（近世）の３期である。

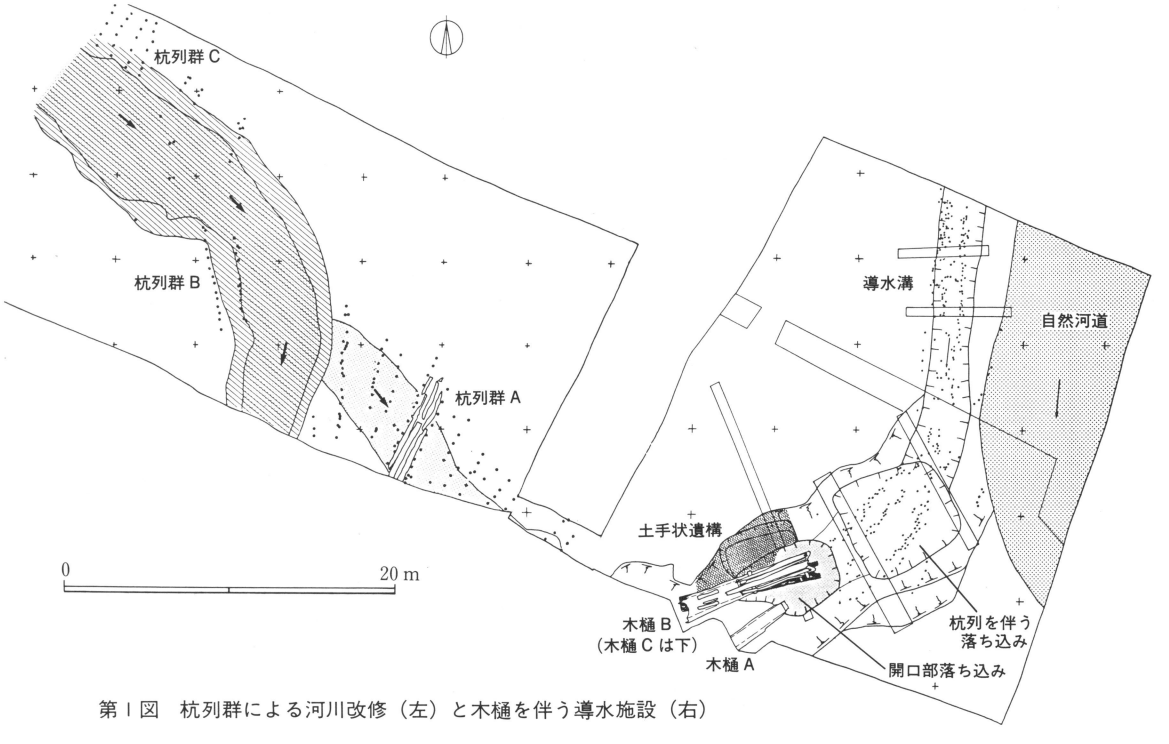
〈Ⅰ期〉　この時期に属する居住に関わる遺構は明らかにされていない。しかし、「木樋を伴う導水施設」と「杭列群による河川改修」が遺跡の西部で検出された。

「木樋を伴う導水施設」とは、３本の木樋と木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み、木樋北の土手状遺構、木樋北東の杭列群を伴う落ち込み、それに接続する導水溝で構成される（第１図）。

［木樋］木樋Ａは、長さ3.9m以上（西の一端は調査区外に伸びているので全長は不明）、幅0.9m、内法0.8m、深さ0.2mの規模をもち、他の２基と同じく丸太を半割にしてＵ字形にくりぬいてあるが、蓋はない。埋土も白色砂が堆積している。開口している東端部には、えぐり込みによる段差があり、組み合わせ式になっていたと考えられる。開口部では開口部方向に傾斜し下がっているが、西半部は反対方向にやや傾斜している。材はクスノキ。

木樋Bは、長さ8.7m、幅1.2m、内法0.9m、深さ0.3mの規模を有し、丸太を半割にしてU字形にくりぬいている（土圧のため側壁部と中央部で縦に割れている）。側壁部の上端部には4ヶ所のえぐり込みを入れ、合計8本の横木を渡し、その上に板材5枚を縦方向に敷いて蓋としている。板材の中には転用材もある。木樋の中の土は周囲と同じ青灰色シルトで砂はない。内部より「田」と墨書された須恵器椀の破片が出土した。木樋Aと同じく開口部方向に傾斜（約5°）し下がっているが、木樋に沿って打たれた木樋を留めるための杭の先端のレベルを見るとほぼ同じであることから、本来は水平か水平に近かったと思われる。材はヒノキである。

木樋Cは、木樋Bの真下にほとんど長軸を一致させて設置してあり、長さ8.6m、幅は開口部で1.1m、出水口部で0.8m、深さは開口部で0.1m、出水口部で0.4mの規模を有し、丸太を半割にしてU字形にくりぬいているが、開口部では極めて浅くフラットに近い。側壁部の上端部に5ヶ所のえぐり込みを入れ合計4本の角材の横木を渡し、その上にまるみをもたせた板材3枚を縦方向に敷いて蓋としている。規模はやや小振りであるが、形状は木樋Bと極めて酷似している。ただし、木樋Bより丁寧に作られているとの印象を受ける。木樋内部の土は灰褐色砂である。出水口部から中央まで開口部方向に強く傾斜して下がっているが、中央部から開口部まではほぼ水平である。材は木樋Bと同じでヒノキである。（第2図）



第1図　杭列群による河川改修（左）と木樋を伴う導水施設（右）

[木樋開口部の乱杭を伴う落ち込み] 木樋Ｂ・Ｃの開口部を取り巻いて、幅９ｍ、長さ６ｍ、深さ1.7ｍの規模を有する落ち込みがある。木樋Ｃを設置した時点で掘り込まれ、木樋Ｃの開口部は完全にこの落ち込みの中にある。この落ち込みには、木樋の開口部を囲むように、不規則な杭群とそれに絡んだ加工痕の見られない自然の丸太材が見られる。杭の中には長さ２ｍ、直径20㎝と太いものもあるが、その他はおおよそ10㎝前後の太さである。「万」と墨書された灰釉陶器の皿がこの乱杭の中から出土している。

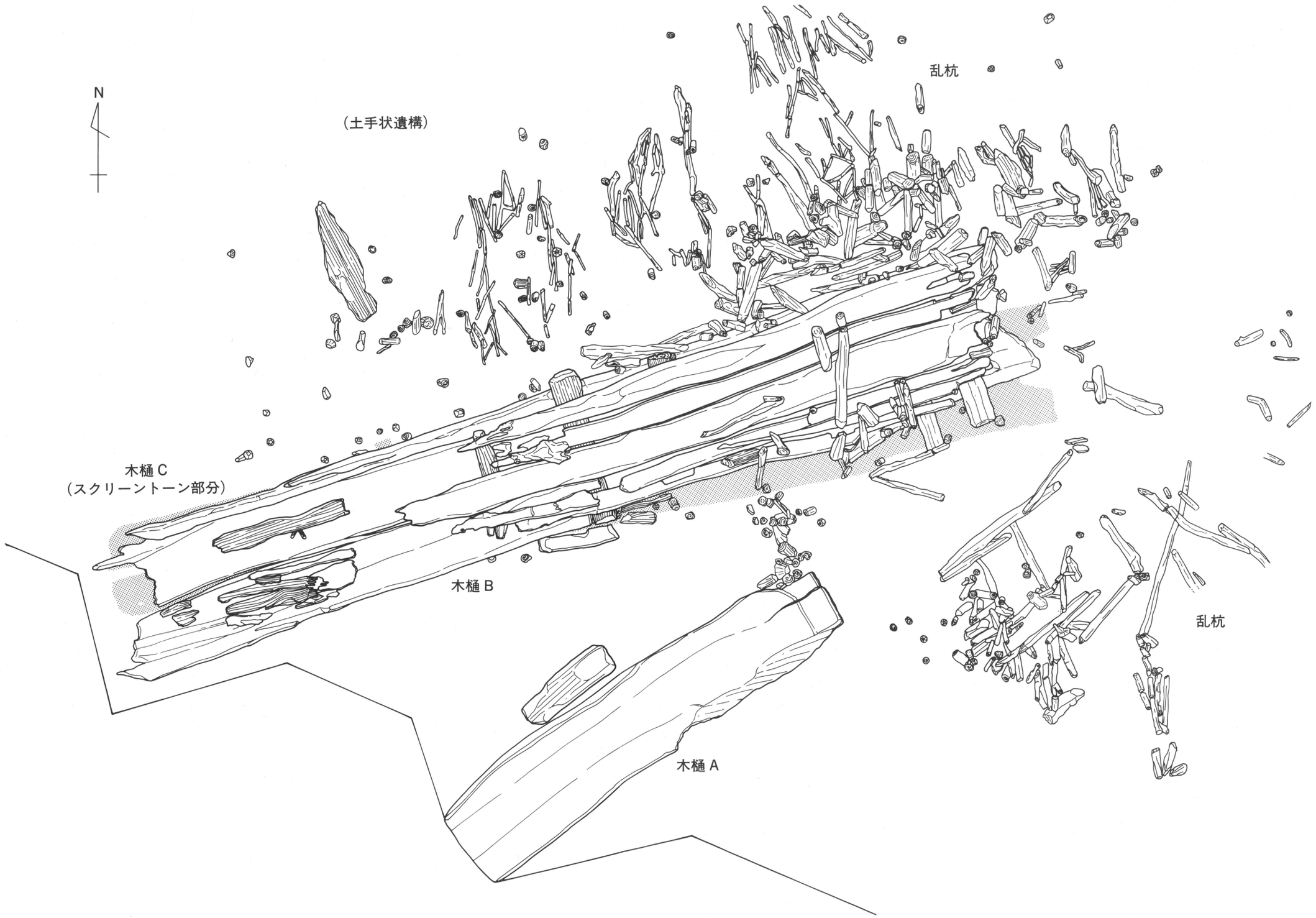
[土手状遺構] 木樋Ｃの北に、木樋の長軸に直交する方向に、小枝のない細い枝やヨシ・アシの類が同じ方向で、水平に（木樋に近づくにしたがって傾斜しながら）、少なくとも12層以上（高さ0.5ｍ）が、灰色土と交互に敷かれ、版築状に堆積している。またこれを留める機能を持つと思われる杭が打ち込まれている。一部は木樋Ｂと木樋Ｃの間や落ち込み内にも存在する。木樋Ｂの掘り方によって破壊されていることから、この遺構は木樋Ｃに伴う土手状遺構と考えられる。ちなみに木樋Ｂに伴う土手遺構は削平されたため検出されていない。

[杭列を伴う落ち込み] 開口部の落ち込みの東に、東西6.6ｍ、南北６ｍ、深さ1.6ｍの規模を有する急に深くなる落ち込みがあり、その中に杭列が打たれている。杭列は５列と見られ、東の２列は短いが、西の３列は長く、特に中央のは２本セットで南北に弧状に貫いていて、北の導水溝の杭列につながっている。杭は先端のみ削ってとがらせ、残りは樹皮を残している丸太杭がほとんどで、太さも10㎝前後が圧倒的に多い。杭の先端は落ち込みの底には届かず、落ち込みが掘削された時期と杭列が打たれた時期に差があることを示している。

[導水溝] 杭列を伴った落ち込みにつながる溝は、幅2.5ｍ、深さ0.9ｍの規模で、自然河道に沿ってほぼ南北に16ｍ走り、調査区外に続いている。この溝は掘り直しが少なくとも１度行なわれ、新しい溝には護岸用の杭列が両肩に見られ、南の落ち込み部に打たれた中央の杭列につながっている。

木樋内部および周辺で検出された須恵器や灰釉陶器からみて、木樋Ａ・Ｂの築造時期は平安時代中期（Ｏ－53）であり、木樋Ｃも木樋Ｂと構造が類似することからそれほど時期が下るとは考えられない。

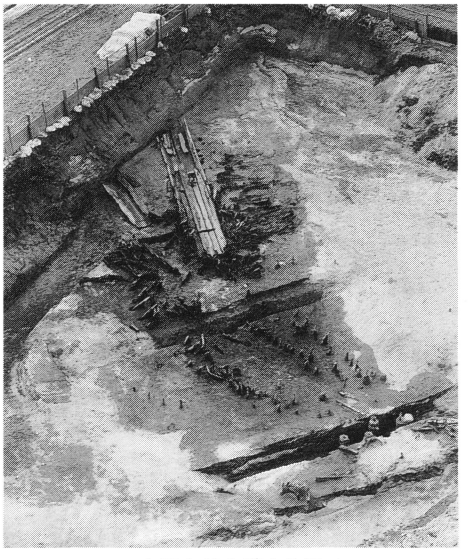
さて、この木樋を伴った導水施設の機能を整理しておくと、[導水溝] によって北から南に水を導き入れて、いったん [落ち込み部] に貯水したのち、[土手状遺構] で水位を高めて水をオーバーフローさせ、[乱杭] で流木・葉・ごみなどを除去してから [木樋] を通って南の高所に送水したと考えられる。ただし、出水側について



第 2 図　木樋平面図　1：40

は調査区外であるため内容は分からないが、遺物の量が極めて少ないことから集落とするよりは水田である可能性が極めて高い。

木樋が検出された発掘区の西において、自然河川の流れを変えるためのものと考えられる杭列群が検出された。杭列群は大きく3群に分けることができる（第1図）。杭列群Aは自然河川を横断して打たれており、杭にはつる状の植物・小枝が「しがらみ」状に絡んでいる。また、杭列と杭列の間には自然木が敷きつめられ、特に中央部では太い丸太が3列横たえられ、動かないように杭でとめられている。西端の杭列は他と比較して密度がもっとも高い。杭列群Bは、自然河道がL字状に曲がるコーナーの川肩に沿って打ち込まれており、「しがらみ」はなくつる状の植物が数条水平に渡してある。また杭の密度は高い。杭列群Cは自然河道に直交して半分ほどかかり、杭にはつる状の植物・小枝・ヨシアシ類が「しがらみ」状に絡んでいる。これらのことから次のように考えられる。本来自然河川は北西から南東にまっすぐに流れていたが、何らかの理由で、流れを南に変える必要が生じたために、杭列群Aで流れを堰き止め（締め切り）、杭列群Bを護岸として南に方向転換させた。また、杭列群Cは、水流を制御する機能があったと推定される。



木樋を伴う導水施設



杭列群による河川改修

これらの杭列がいつ打たれたかは、杭列群A付近で平安時代に属する土器小片が出土しただけで詳細は不明であるが、土層堆積から見ると木樋とほぼ同時期と考えて誤りはないと考えられる。

〈II・III期〉 中世の集落の構造として、数条の溝によって区画される屋敷地が５ヶ所確認された。うち２ヶ所は一部が明らかになっただけであるが、他の３ヶ所はほぼ全体像を把握することができた（第３・４図）。屋敷地や溝などから13世紀から15世紀中頃の遺物が出土している。

屋敷地Ａは25ｍの正方形を呈する溝に区画される小規模な屋敷地で、東半部では溝が掘り直され外へ拡張されている。屋敷地内部には井戸を持たず、遺物も極めて少ない。屋敷地Ｂは、東西55ｍ（南北は不明）の規模を有し、膨大な数の柱穴と土坑が検出され、出土遺物の量も多く、石組の井戸と素掘りの井戸を持ち、この集落内で主体となる屋敷地と考えられる。屋敷地Ｅは、２本の溝が不整方形に巡り、内側の区画は東西25ｍ、南北20ｍの規模を持つ。内部からは建て替えられた掘立柱建物２棟、叩き締められた土間状遺構と方形の竪穴を伴う建物、石組の井戸、土坑などが検出された。

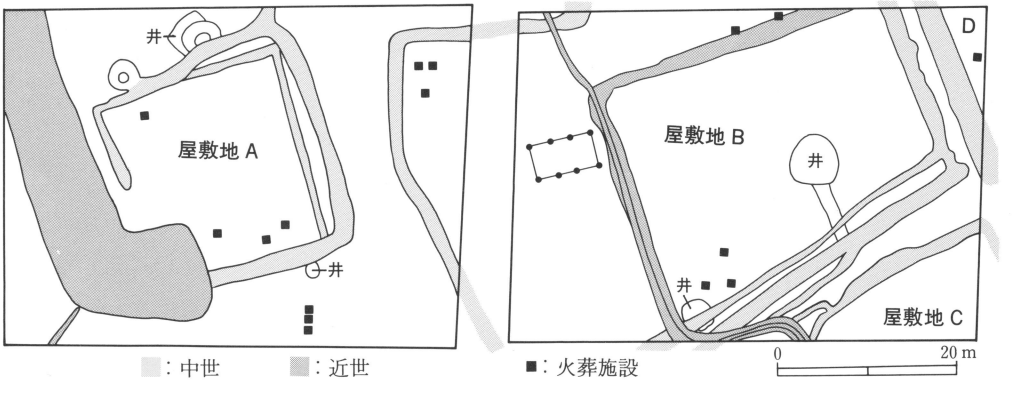
以上の中世の集落が廃絶した後に、火葬施設が発掘区全域に多くても３基ほどのブロッ



屋敷地Ｅ

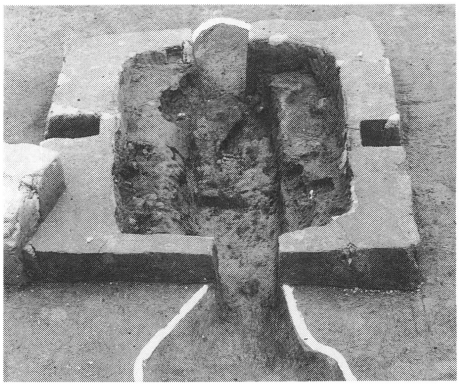


石組井戸



第３図　II・III期遺構配置図（左：Ａ区　右：Ｂ区）

クにまとまって点在する。検出総数は22を数える。良好に残存するものを見ると、一辺1m前後、深さ30cmほどの長方形の燃焼部と中央部に長軸にそって通風溝を有する構造が明らかになった。燃焼部の壁面は熱を受けて赤く焼けており、内部から炭化物、灰に混じって骨片と歯根が検出されている。しかし、土器が伴出しないため時期は明らかでないが、堆積した土壌を考慮すると、中世末期から近世初めであると考えられる。



火葬施設

調査区西部で、常滑産の甕と桶を伴った江戸時代末期の小規模な水田址を検出した。この水田の南西隅では、常滑産の土樋（土管）を使った排水施設も明らかになった。

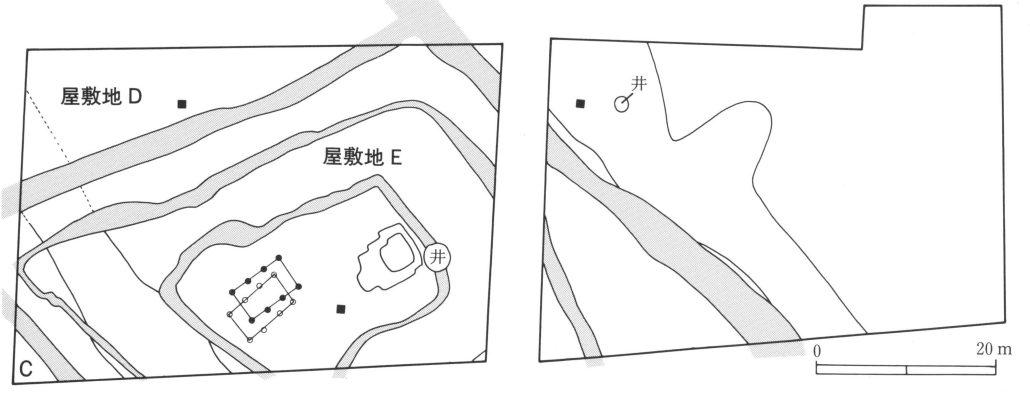


江戸時代末期の土樋

まとめ

平安時代の大型の木樋を使った灌漑施設は、全国で初めての検出されたものである。杭列による自然流路の改修も含め、地方での水田開発を具体的に明らかにできる非常に重要な資料となるであろう。また、中世の灰釉系陶器、瀬戸美濃産の施釉陶器、常滑産の焼き締め陶器に混じって200点以上の貿易陶磁片が出土するなど、中世の集落の構造とその性格を解明するうえで極めて良好な遺跡でもある。

（都築暢也）



第4図　II・III期　遺構配置図（左：C区　右：D区）

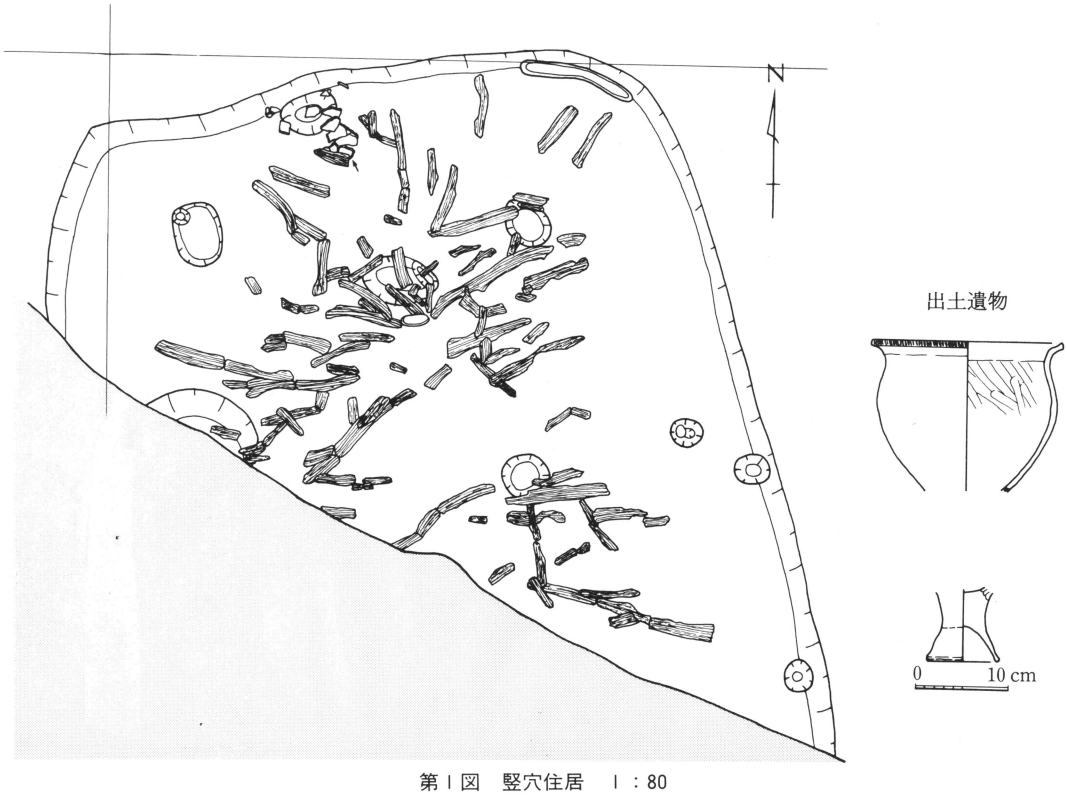
岡島（おかじま）遺跡

調査の経過

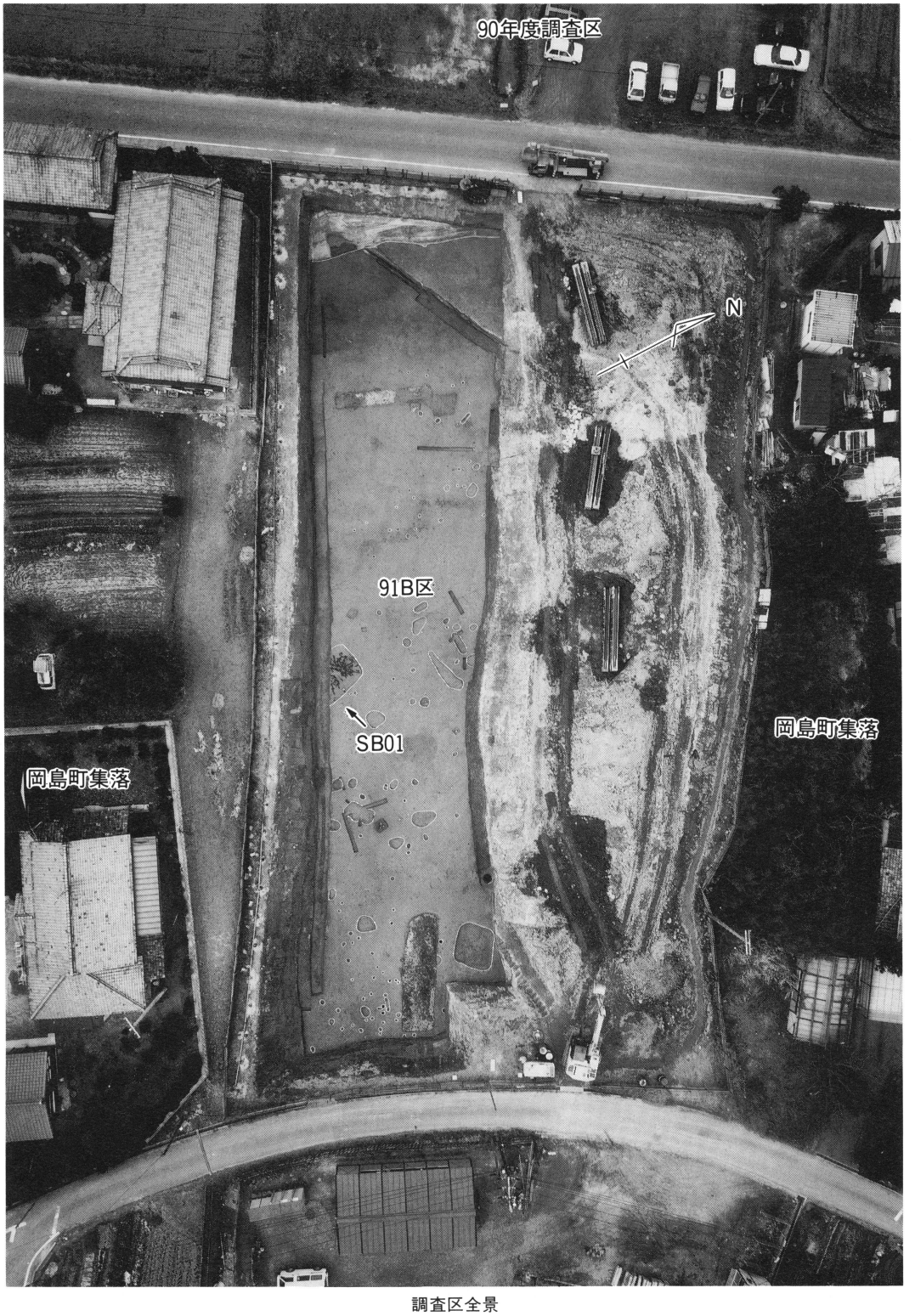
岡島遺跡は、矢作川左岸の沖積低地上の微高地に所在する弥生時代を中心とした集落遺跡である。今回の調査は、平成元年度から開始された国道23号バイパス建設に先立ったもので、面積は2,500㎡である。

調査の概要

本年度の調査区は平成２年度調査区の東方にあたる。調査にあたっては、排土置き場の確保などの理由からＡ・Ｂの２地区に分割した。なお、今回の報告は、本稿を執筆している現在（１月下旬）も調査が継続中である関係上、91Ｂ区の紹介にとどめる。今回の調査で検出された遺構は竪穴住居１棟、土坑90基などがある。このうち特筆すべきは竪穴住居の存在で、プランは長方形を呈するものと考えられる。規模は、確認できた１辺が5.6m。床面では２基の柱穴と炉のほか、放射状に炭化材が分布し、これは垂木などの上部構造材である可能性を持つ。出土遺物には下図に示す台付甕がある。　（池本正明）



第Ⅰ図　竪穴住居　Ⅰ：80



調査区全景

牛ノ松遺跡

調査の経過

幡豆山地の頂部をなす茶臼山（標高290m）から北に伸びる低丘陵は、額田郡幸田町大字須美地内で緩やかな勾配をなして台地へと続き、さらに須美川に至る。牛ノ松遺跡はこの台地上に立地する遺跡で、地籍は大字須美字牛ノ松である。

今回の調査は、国道23号線バイパス建設に伴う事前調査として、500㎡を平成３年６月～８月にかけて実施した。この地は、平成２年２月にも、今回の調査区の東に隣接する場所で調査が行われている。

調査の概要

今回の調査で検出した遺構は、近世～現代の溝数条、中世の溝数条と掘立柱建物１棟、井戸状遺構１基、多数の土坑である。遺構の分布を見ると、ＳＤ18を境にしてそれ以西には見られない。この溝は、屋敷を囲む溝であった可能性も考えられる。

出土遺物の主なものは、灰釉系陶器（椀・小皿）が大部分であり、土師器（皿）、常滑（甕）、青磁、それに若干の近世陶磁が混じる。平成２年の調査では、これらのものに加えてフイゴの羽口、鉄滓、「上」と書かれた墨書土器が見られる。これらの出土遺物の諸特徴から考えて、この遺跡は鎌倉時代後半期を中心とする集落址と考えられる。

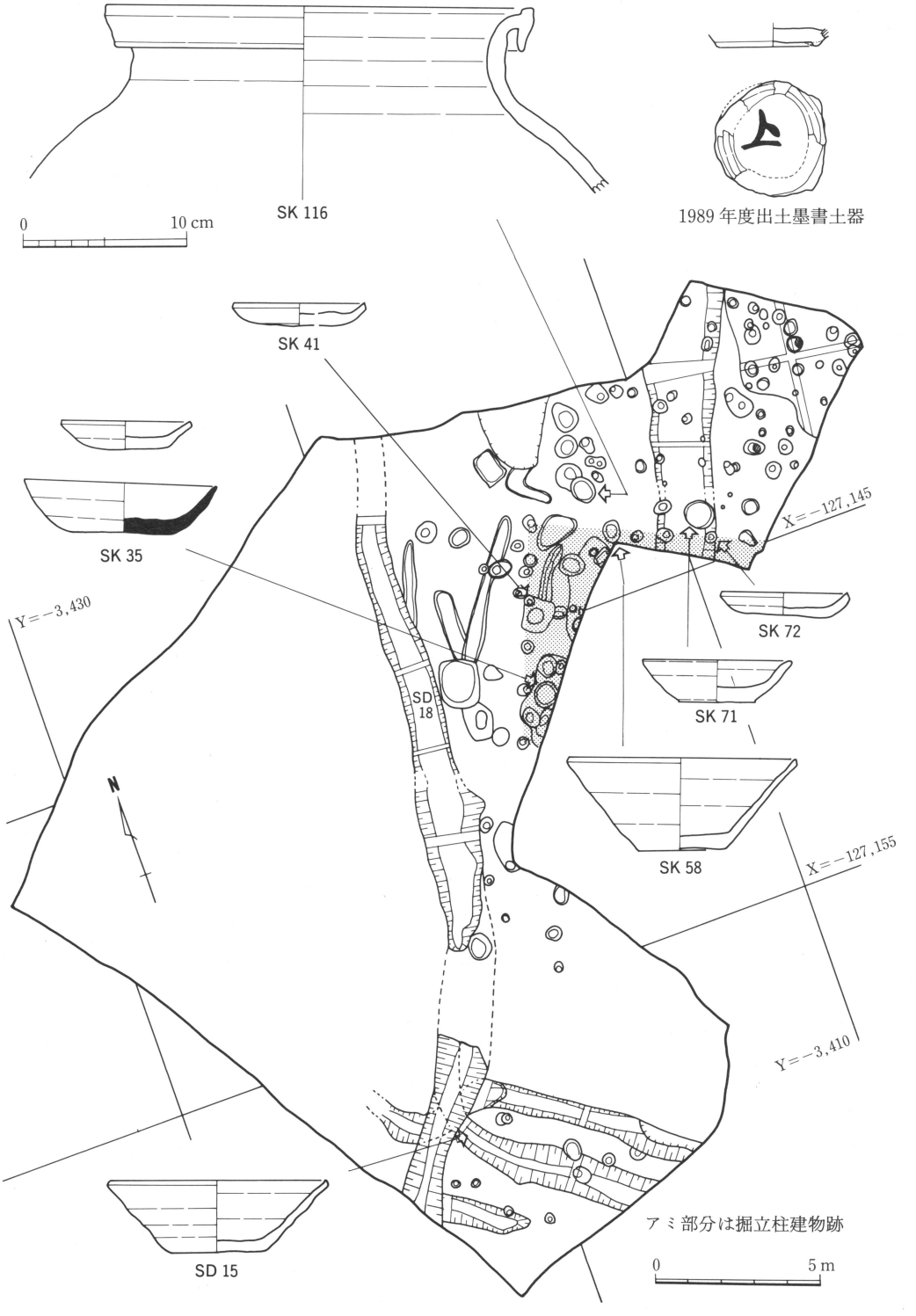
鎌倉時代の初めより、この地は「蘇美御厨」として伊勢神宮領になっており（『伊勢大神宮神領注文』）、権門勢家の地方進出を具体的に追求する上で今回の調査結果は意義を有するものである。より広範囲の遺跡調査及び結果が待たれる。（大橋正明）



調査区全景



井戸状遺構（ＳＫ71）



第 I 図　中世遺構図及び主な出土遺物

伊保（いぼ）遺跡

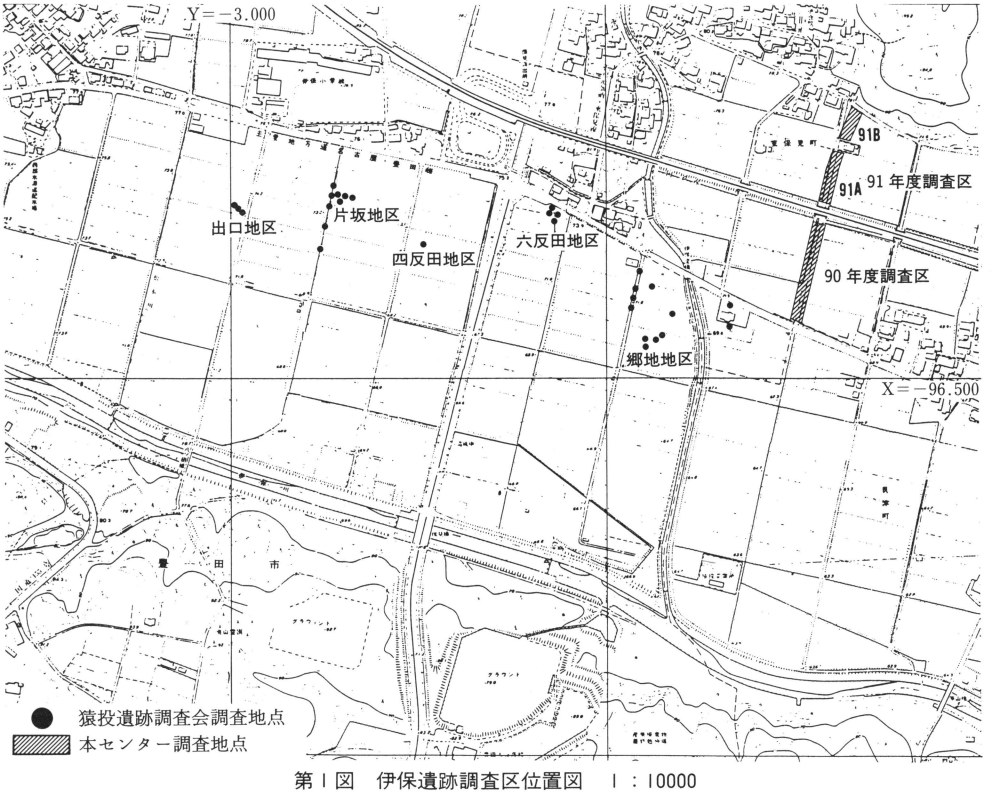
調査の経過

伊保遺跡は豊田市保見町、東保見町に所在し、猿投山から南に伸びる舌状台地南端に東西に細長く立地する。昭和44年に猿投遺跡調査会により調査が行われ、弥生時代後期～古墳時代の遺構・遺物、奈良・平安時代の遺物を採集している。

調査の概要

今回の調査は県道加納東保見線建設に伴う事前調査で、東保見町抱六地内において昨年度より継続して行っている。今年度は2調査区（91A・B）を設定したが、91B区は排水溝が調査区の中央を横断しているため、さらに2分割（Ba・Bb）せざるを得なかった（第1図）。面積は1,750㎡である。これまでの調査の成果を昨年度も含め時期ごとに紹介する（第2図）。

・旧石器時代（Ⅰ期）　木葉形尖頭器4点が出土。出土地点は近いもののひとつのユニットを形成する確証は得られなかった。

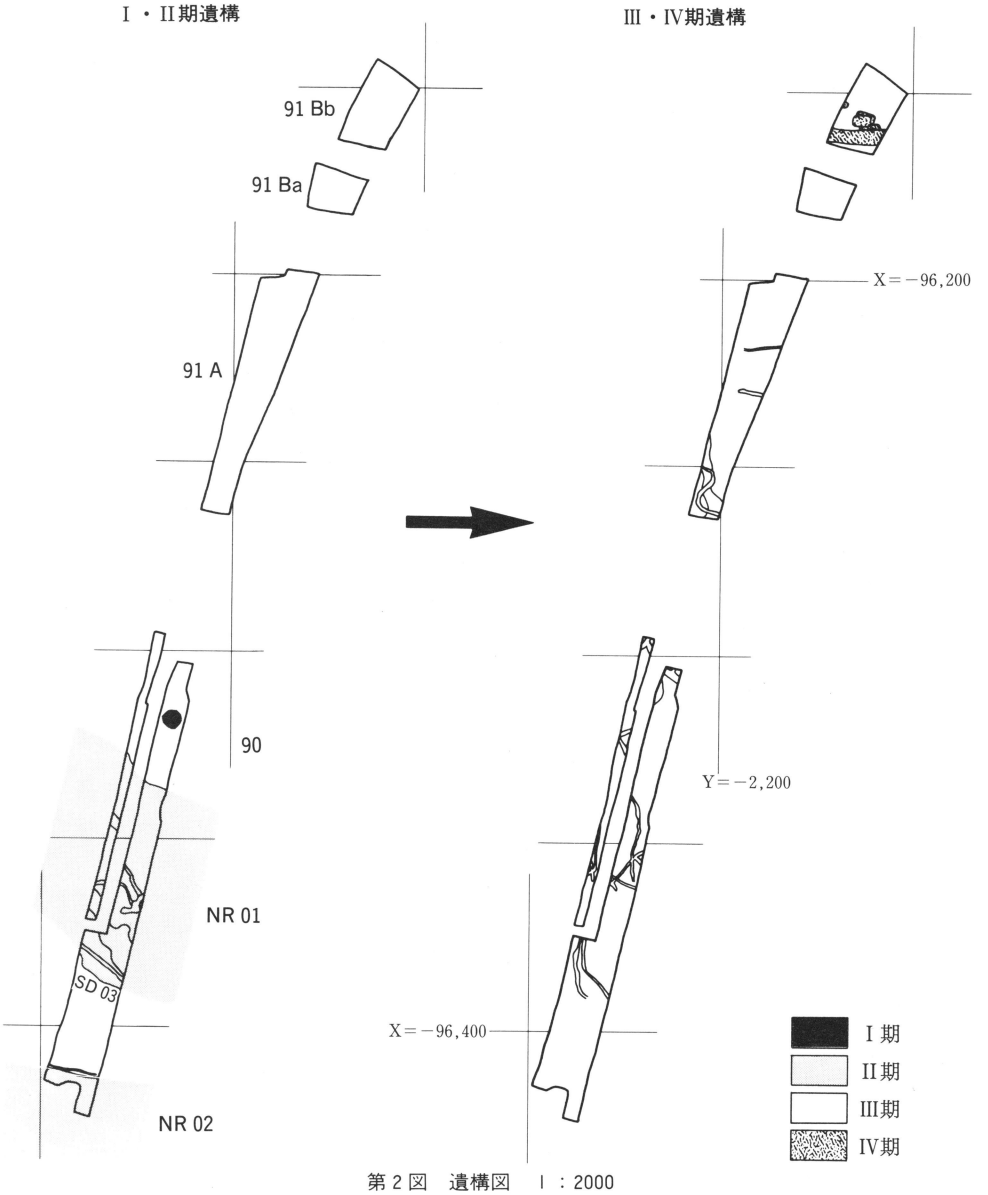


第Ⅰ図　伊保遺跡調査区位置図　1：10000

・弥生時代後期（II期）　自然流路２条（ＮＲ01・02)、溝１条（ＳＤ03）を検出。ＮＲ01はII期にほとんど流れを止めており、その代わりにＮＲ01南肩に沿ってＳＤ03を掘っている。ＮＲ02はIII期まで継続している。伊保遺跡東限と考えられる。

・奈良・平安時代（III期）　溝17条を検出。ただし、時期決定の資料が極めて少なく推測の域を出ない。

・鎌倉時代（IV期）　91Ｂｂ区において検出。集落の一部と思われる。調査途中のため詳細は摑めていない。　（岡本直久）



第２図　遺構図　I：2000

三斗目遺跡

調査の経過

三斗目遺跡は豊田市の東部、坂上町に所在する。

豊田市は矢作川が南流する沖積平野を市域の中央として、その周囲には丘陵地帯が展開している。その東部丘陵地帯を南北に流れる巴川に注ぐ仁王川の形成した開析谷の南斜面に三斗目遺跡は位置している。遺跡は仁王川沿いの谷を本谷としてそれに合流する支谷の形成するＹ字状をなす地区のちょうど合流部にあり、標高は約200ｍを測る。遺跡付近は水田が山裾まで造成され、しかも段差の大きいところも存在していたので、削平された部分のあることが予想された。

本調査は仁王川の改修工事に伴う事前調査として実施したもので、期間は平成３年11月から平成４年３月までの５ヵ月を要した。

調査の概要

三斗目遺跡はすでに『松平町誌』に縄文時代後期の遺跡として紹介されている。豊田市教育委員会による試掘では包含層の存在が確認されていたので、耕作土の表土はぎは注意深く実施した。

調査区の西側約３分の１は包含層はすでに削平されてなく、耕作土直下でベース面の検出となり、そこでは小穴の点在が確認された。東側３分の２では耕作土直下から河原石が露出し、一部は水田床土に突き出していた。河原石には集中地点が認められるとともに、包含層も20cmから30cmほど存在していた。調査区北縁では大量の縄文土器を含む黒褐色土と砂層がラミナを形成する旧河道が検出された。

調査は包含層中での遺構検出が困難であったので、土器・石器などの遺物は出土地点を記録しながら取り上げた。ところどころ集中地点はあったが、１月の厳冬期になると凍結・霜などによって遺物の損傷が著しくなったので、出土状態の記録をとることはきわめて困難であった。包含層は基本的には縄文時代後期に属すのであるが、中世陶器が包含層中に含まれている部分があり、一部中世に攪乱されている可能性を示した。

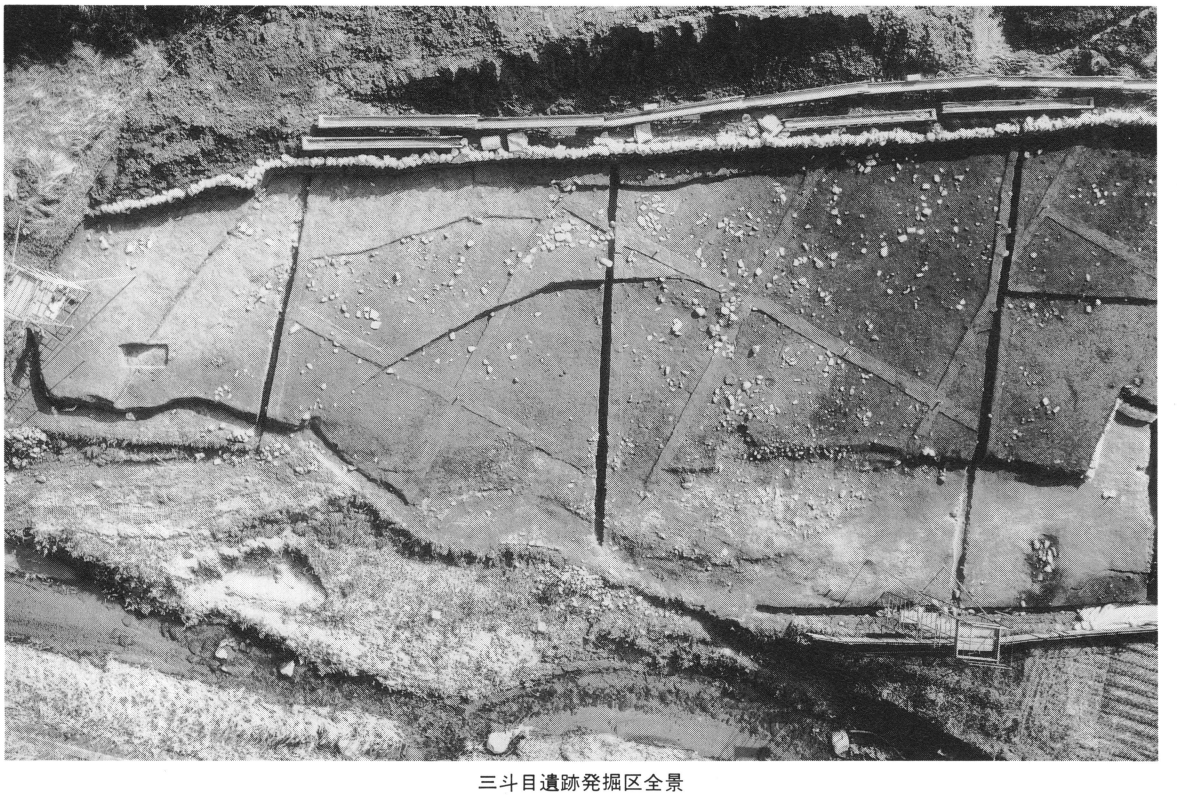
包含層中において検出した集石は、ベース面における掘り込みの有無を確認するまで除去しないで調査を進めた。その結果集石の下部では土坑の検出が相次ぎ、多くの集石が実は土坑埋土上部に置かれたものであることが判明した。しかし、そのことはかえって土坑を伴う集石に、縄文時代ではなく中世に築かれたものが含まれている可能性を生じることになった。実際中世陶器の椀・小皿が置かれた状態で出土した地点があり、包含層も二次

的に移動している部分もあることから、包含層中での遺物のありかたの検討が重要となった。

集石以外に検出された遺構には、包含層下部で検出された土坑、石囲炉および住居跡、ベース面直上に構築された石敷炉があり、これらは縄文時代後期であることが確認された。

ところでベース面は調査区の西部3分の1が砂礫混じりの粘土層、東部は黄灰色砂層であった。さらに深く断ち割った結果、ほぼ調査区に重なって旧河道が検出された。

以上概要を述べたが調査は終了してまもなく、来年度には報告書の刊行を予定しているのでそこで詳しく報告することになろう。　　（石黒立人）



三斗目遺跡発掘区全景

跡ノ口遺跡（あとのくち）

調査の概要

跡ノ口遺跡は稲沢市一色森山町に所在する。低平な尾張平野内に点在する微高地上に位置し、標高は約2mを測る。

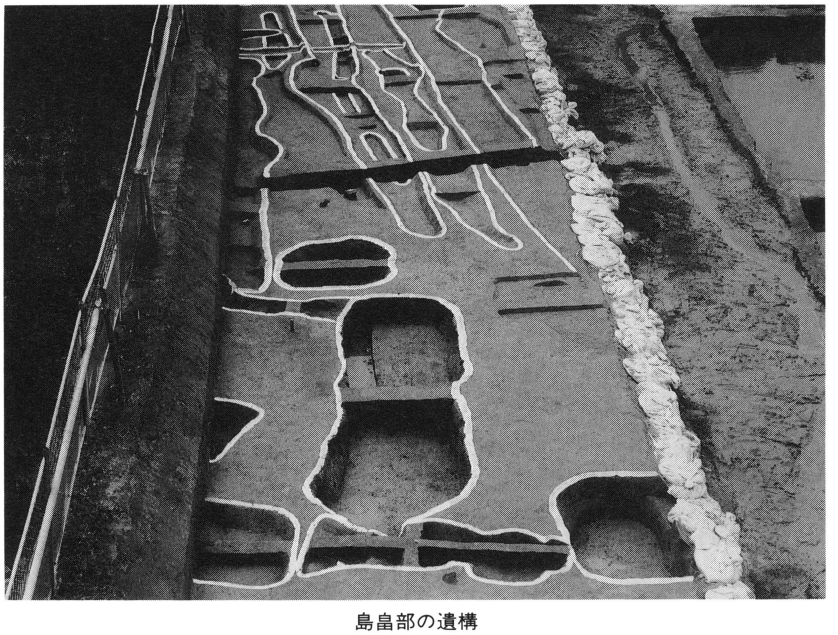
調査は県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として、平成3年4月から7月にかけて実施した。

調査区はA・B・Cの三つに分かれ、いずれも島畑と水田の両者にまたがる部分である。このうちC区では何も検出されず、最近まで水田であったことが判明した。遺構・遺物はおもにA・B区で検出された。

A区では中世の大溝のほか古代から中世にかけての土坑が多数検出された。しかし、調査区の約3分の1は最近まで水田であり、そのためほとんど削平されていた。

B区ではおもに中世の土坑を検出した。しかし、ここも農業用水管の埋設や水田の拡張によって遺構が削平されていた。

遺跡付近の島畑は水田を埋め立てて設けたもののほかに、もともとの微高地を畑としていたもののあることがわかった。つまり、現在の島畑点在という景観は、自然堤防を寸断した結果である部分をも含んでいることになる。そして当初から島畑であった部分（微高地）において遺跡が削平を免れていたことが明らかになった。（服部俊之）



島畠部の遺構

一色長畑遺跡

調査の概要

跡ノ口遺跡の東方約500mにあり、付近には島畑が点在し、本遺跡も島畑下に存在する。遺跡の標高は約２ｍを測る。

調査は県道馬飼井堀線建設に伴う事前調査として平成３年６月から７月にかけて実施された。

調査区はＡ・Ｂの二つで、遺構・遺物はおもにＡ区で検出され、Ｂ区は水田造成による削平によって無遺構であった。

遺構・遺物は弥生時代中期末のほぼ一時期に限定され、竪穴住居跡５、土坑数基が検出された。調査区の約５分の１は水田造成によって削平されていた。

竪穴住居跡５棟のうち１棟は焼失家屋のようで、床面上には甕を主体とする土器群が炭化物・焼土とともに散乱していた。また、本住居跡東端の周壁際からは細片となって散らばった磨製石斧（伐採斧）片とチャートの石核などが集中して出土した。

稲沢市周辺は尾張平野の低地帯として沖積作用を強く受けたであろうことが想像できるけれども、今回島畑直下の比較的浅い地点から弥生時代の集落が検出されたことは、島畑の分布、島畑と水田の新旧関係の検討を含めて、改めて遺跡の分布を問う時期にきているように思える。

（服部俊之）



調査区全景



遺物出土状態

不馬入（めいらず）遺跡

調査の概要

不馬入遺跡は、額田郡幸田町大字須美字不馬入に所在する。遺跡は幸田町の西端、幡豆山塊の谷裾北向き斜面（標高約53m）に立地し、周辺には雑木林、果樹園、畑地、山林が広がっている。

調査は国道23号線バイパス建設工事に伴い、平成３年４月より６月まで実施した。調査区は旧畑地であったが、平坦面を確保する際削平された部分と盛られた部分がみられ、堆積状況は単純ではなかった。

基本層序を概観すると、調査区東側の低い部分には現代の客土が厚く盛られており、中央部では耕作土が、西側では礫混じりの整地層が堆積していた。削平された部分では黄褐色砂質シルト層、赤褐色シルト（通称「山砂」）層、岩盤層が検出でき、さらにこの平坦面を広く確保するために、低い部分には礫混じりの整地層が同時期平坦面として認められた。この面から検出された遺構は、土坑23基、溝３条、井戸２基、石列等であった。これらの遺構から検出された遺物は、いずれも18～19Ｃにかけての陶器、磁器などでありこの遺構面の造成時期を示唆している。

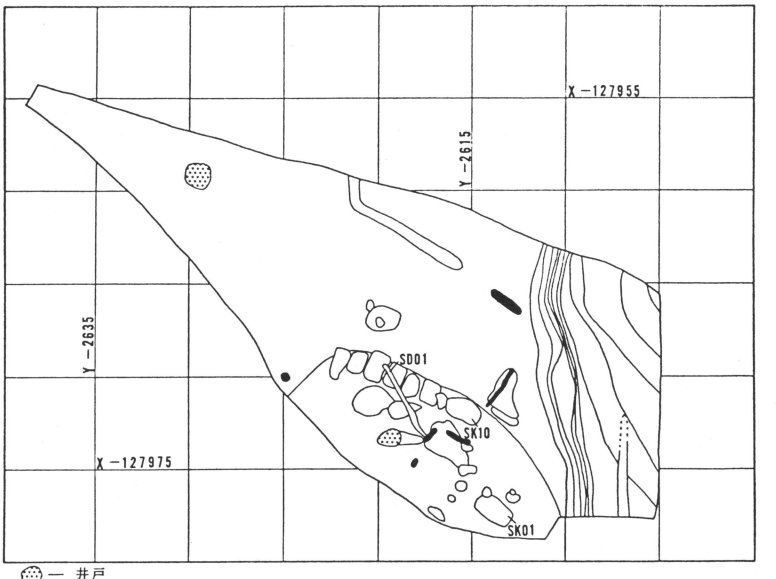
調査区は旧平坂街道沿いの集落からは離れた地点に位置しており、調査区内にみられる遺構、遺物とも考え合わせ、現在その性格を検討中である。　　（松田　訓）



作業風景



全景（南西より）



第１図　調査区遺構図

高樋（たかとい）遺跡

調査の概要

高樋遺跡は、豊田市東部の山間部、坂上町に所在し、矢作川の支流の巴川に注ぐ仁王川によって形成された南向きの斜面に立地している。仁王川の約１km下流には、ほぼ同時期に調査された三斗目遺跡・三本松遺跡がある。今回の調査は、県道坂上・花沢線の拡幅工事にともなう事前調査として実施された。

道路にそった細長い調査区の東端は水田を開くために削平され、西端は現代の耕作土の直下が旧河道となっている。これらの部分を除いて、地表から約80cmの部分に黒灰色土層があり、この層から縄文土器や石器が約500点ほど出土した。土器は早期のものが中心であったが、ほとんどが小さな破片であり、器形の復元は困難である。またこの包含層からさらに80cm下の、仁王川の氾濫によって堆積したと思われる灰白色砂質土の上面から、早期の押型文土器が１個体出土している。

遺構は、調査区の西の旧河道に接する部分で、土坑がひとつ発見されたのみであった。この土坑の埋土の最下層からも早期の押型文土器と石鏃などが数点出土している。土坑の全形はわからず、性格も不明である。

遺物の出土状態や地形から、この遺跡は斜面からの崩落による遺物の二次散布地でないかと思われるが、調査区の南の仁王川に面した平坦な水田の部分に遺構が広がっている可能性も考えられる。（余合昭彦）



調査区全景



石匙出土状況

三本松遺跡

調査の概要

三本松遺跡は、豊田市坂上町を東西に流れる仁王川に、南北から沢が流れ込む地点の近くに所在する。平成２年12月に仁王川の河川改修に先立つ豊田市教育委員会の試掘調査によって遺跡の存在が確認され、平成４年１月から３月にかけて本センターが事前調査として発掘を行った。調査面積は940㎡である。なお約500ｍ東には、ほぼ並行して調査された三斗目遺跡がある。



調査区遠景（北より）

調査区は、北向き斜面の山裾の部分にそって設定されており、仁王川によって形成された自然堤防と後背湿地にあたる。調査前の地目は水田である。後背湿地であった部分は粘質土が約１ｍ堆積し、山腹から崩落したと思われる石が散乱している。自然堤防上には、水田を開くために削平されて砂層が露出している部分を除いて、約30㎝の厚さで黒褐色シルトの遺物包含層がある。この包含層からは、縄文時代晩期の土器や石器の他に、中世の灰釉系陶器が出土している。包含層を取り除くと小型の土坑やピットが検出された。土坑の中には住居址かと思われるものもあるが、現時点でまだ調査は終了しておらず、詳細は不明である。

（余合昭彦）



調査区全景（東より）



石皿出土状況

坂口（さかぐち）遺跡

調査の概要

坂口遺跡は、東加茂郡旭町大字池嶋字坂口に所在する。遺跡は矢作川によって東西方向に形成された谷地形の左岸、河岸段丘高位面に位置し、川に向かう北向きの緩斜面（標高約114m）に立地している。調査は県道島崎豊田線拡幅工事の事前調査として、平成３年10月から平成４年１月まで行われた。

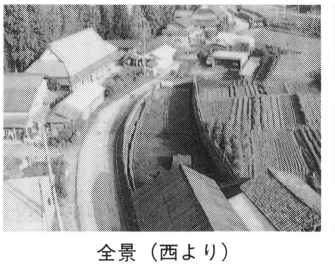
基本層序を概観すると、旧畑地の耕作土約30cmの下に明灰褐色粗粒砂層があり、この下に粗粒砂ブロックを多量に含む灰褐色シルト層が約30cm堆積している。このローリングを受けたと思われるシルト層の直下に、80～100cmの厚さで黒褐色シルト層が堆積しており、縄文早・前・中・後・晩期の土器、石器等がこの層に含まれている。この層内は肉眼による分層が不可能であり、遺構も検出し得なかった。したがって任意による分層（約10cm）でこの包含層を掘り下げた後、最終検出面では土坑状の落ち込み等を検出し得たが、遺構に伴う遺物は希少であった。

今回調査を行った坂口遺跡の遺構、遺物は、矢作川流域における縄文時代の文化動態を窺う上で貴重な資料になるものと思われ、古環境復元のための科学的分析も含め現在整理検討中である。

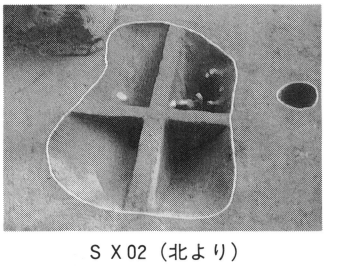
（松田　訓）



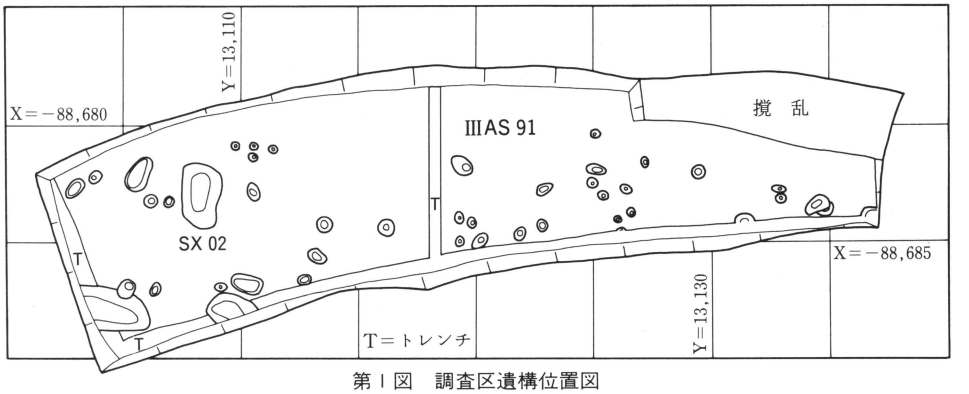
遠景（南東より）



全景（西より）



ＳＸ02（北より）



第Ⅰ図　調査区遺構位置図